
ハンター初心者

楓 紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハンター初心者

【Zコード】

N8156C

【作者名】

楓 紅

【あらすじ】

ハンターになると夢見た弟から、姉はそれを了承しつつも、自分も弟離れをしようと秘かにハンター試験を受けに行く。そして、姉にはとても不思議な力を持っていた。それを気に入る人物が！女だとばれるな！姉！

姉との最後の別れ

「ゴン！本当にハンター試験、受けに行くの？」

ミケさんよりも誰よりも、この村で心配性だと知られている、自称、
「ゴンの姉、マロン。」

「ゴン」「うんーだつて、自分で決めた道だし！行きたいよーマロンー！」

「ゴンは、マロンの事を本当の姉のように慕い、最後の別れを告げる。

「行つても良いけど、心配なのよー怪我とか、変な男とか変な殺人
鬼とか居そつでー！」

・・・勘が昔から鋭いマロン。

当たつてます；

「ゴン」「けど、行きたいんだー！」

「うなつた

「ゴンは梃子でも動かない。

「・・・分かつた！行つておいでーけど、バンクは連れて行きなー！」

キッ

私は、なぜか、妖精みたいな幼獣みたいなモノを宿つていた。

「ゴン」「ええ？カーバンクルを？それなら、リバイアサンの方がいい
！」

「贅沢言わないのーゴンには操れないんだからー良い？バンク？ゴ

ンの事、宜しくね?』

バンク『はい!御主人しゃまー。』

ちよつと、悪戯好きで子供っぽい所で『ロンに似てこののでつけた;』
(笑)

『ロン、それじゃー、時間だから、行くねー。』

タツ! -

「怪我して帰つたら、唯じやおかないからねー。」

『ロンは点となり、消えた。』

『アーッ・・・あんたの事だから、追いかけるんでしょ?』

チラシ

『アーッまだ、隣で『ロンを心配そうに見てこる人物に問つ。』

「良く分かつてるー!アーッさん!リバイアサンで飛んでいくから、船
がなくつても平氣だしー。」

『アーッ・・・危険な旅なのよ?』

『アーッさん。そんなんで、私の意思が変わるとでも?』

『ヤツ

『アーッ・・・分かったわ・行つていいじゃー。』

「うふー今までもうつがとつー!アーッさん。」
『ビュンシー

村人「・・・二人とも居ないとは寂しいですね。」
ミート「本当です・」

(良し！一足先に、試験会場に着いた！)

スタッツ

リバイア『・・・本当に、変装するのか？』

(うん！ユニコーンの人間バージョンに！・・・なんで？リバイア
サンがよかつた？)

リバイア『違う！だが、油断ならないぞ？』

(分かつてゐ！それじゃ、行くから、黙つてて？ユニコーン？貴方
の人間の姿を貸して？)

ユニコーン『はい。』

スウツ

マロンの姿はたちまち、金髪の青年になつた。

マロン自身、ゴンとはまつたく似ておらず、年も離れていた。

実年齢は20歳で、身長162cm。体重59kg(増えた・)。

髪の色は、銀髪に青を溶かした感じの、良い感じの女だった。

まあ、そんないい感じの女が一人で試験会場に入つたら、どんな目に会つかわからないし、ゴンには来るのは言つていないので、ばれるとヤバイ！

（フフフツ　vvv
てるよ？）　スツ　ゴン！早くおいで！お姉ちゃんは先に入つて待つ

てるよ？

スツ

جایزه ایجاد

「えーい！御注文は？！」

「ステーキ定食。」

店主「焼き方は?」

ピクツ

「弱火でじっくり。」

「はいよ！ 奥に通して！」

(やつた！)

スツ

店主

そして、到着した（ステーキは平らげておいた）。

（・・・ムサ・男ばっかり。あ・自分も今、男だつた・ゴンは・・・
つと、まだか・）

チソツ

エレベーターに乗る。

マーメン「番号札をどうぞ。」
番号札を受け取る。

(?番号札。302番つて多いのかな?)

周りを確認してみるが、会場に狭しと人間が入っているので、多いのだと判断する。

(蒸し暑い。301番ってどんな人?)

ギタ「カタカタカタツ。」

(・・・気持ち悪い!アハハハ!何で、あんな格好してるんだらう?)

44番「・・・。」

ジイーツ

(・・・おおい?!)44番にすつゞく見られてるー。)

トンパ「やあ!君、新人だね!」

「・・・。」

無視。
名前はトンパってんだ!」

トンパ「・・・俺は」の試験で、

37回受験してるんだ!」

「・・・。」

トンパ「

お近づきの母「やめよ!」

「・・・。」

トンパ「

・・何とか、いえよ・

「・・・ます。」

トンパ「

?!な・・・なんだ?・

「何で、俺がそれを貰い、飲まなければならない?」一つ、お喋りは苦手でな。ウザイとしか思えない。三つ。これは、警笛だ。今年は

新人漬しをしても意味をなさないと思つが?」

トンパ「?...」

「...ま

だ、何か用があるなり。」

スパンツ!

トンパ「ひい?...」

ドパッ!

「やの、由のよつと真つ一つとするが?」

キツー

トンパ「くわー...」

タツ!

(...「わー...」)

ーン『口が悪いですよ?』

7

(...それじゃー、五月蠅い。)

ヒーヒー

ン『変わつてない氣が...』

(ヒーヒー...良心じやん...言葉遣いなんてー、ヒノの前では直すしー)

ヒーヒー『もつねるわ、ゴンわん離れをしたらどうですか?』

(...「...」)

ヒーヒー『...』

・随分、素直ですね・

(私だけ、20歳だしね。ゴンも子供じゃない。この試験は自分を試すために来てる。ゴンを守りたいからだけじゃない。)

ゴーパーン『……半分以上は「ん」を打つたことを思こでしょ
「うへ。』

(……そんな事なこさー)
・・バレバレです……。』

(へ・どうしたの? ゴーパーン? はわああああー)

44番「……。」
一ツ
ジイ

田の前で、ゴーパーン(人間バージョン)の姿を見ているピエロが
居た。

(い・・・何時の間に・・田・・・田を合わせてしまつてます・・)

ゴーパーン『無理です・・もう、田を合わせちゃつてます・・

(近い近い近い――――――)

一『・・・俺も嫌です・・』

ヒソカ「・・・實に美味しそうだ▽▽」
「・・・ハア? !」

ゴ

壁に瀬を預けているにも関わらず、一生懸命、後ずさる。

ヒソカ「わっ! きのアーッ。どついたんだい?」
「わっ! きの?」

ヒソカ「アレ。」

ペシ

缶を指差す。

第一次試験開始！

「 わあ？俺は知らないぜ？それより、少し、離れてもらひないか？」

ヒソカ「クツクツクvv 良いね。君。名前は？」

「 ・・・ “バロン”。」

ヒソカ「“男爵”？」

「 わう。忘れてくれ。」

ヒソカ「嫌だvv」

「 」

「 あ。 そう。」

ヒソカ「！」

ヒコツ！

ザツ！

一瞬でヒソカから離れた。

（男の時の名）バロンは

「 まあ、覚えてても良い事ないと思つけゞ？」

一ヤツ

ヒソカ「・・・本当に美味しちゃだ」

（ ・・・ 怖かつた！）

キルア「 なあ？」

「 わざわや？」

（？）「 あんた、凄いな。」

キルア（ “ わざわや ”

(・・・「ンと同じ年位か?」) 「何が?」

キルア「ヒソカとあんな風に喋るなんて。」

「あいつ、ヒソカって言つんだ? 君は?」

キルア「・・・キルア。」

「俺の名前はバロン。バロン=男爵って意味なんだ。」

キルア「! だから、ヒソカの奴、男爵って言つたのか?」

「モ。ね? キルア君つて幾つ?」

喋るの嫌いなんじや?」

「? ? ? ああ。それも聞いてたんだ? 嫌いだよ? 新人潰しとかズルする奴。けど、キルア君つてズルはしなさそうじやん?」

キルア「そうとは限らないぜ?」
俺、弟が居るんだけど。」

キルア「?」

素直で直球馬鹿なんだ?」

「すつーじぐ

キルア「ハア? ?」

ルア君もそつなんじや?」

「・・・キ

キルアの顔をじつと見つめる。

ルア「・・・どうかな?」

キ

「12・3歳ぐらいの男の子は素直でなきや。」

キルア（ドキッ！って！相手は男だぞ？…）「ビリして、やつひ彌つ
んだ？」

「…勘かな？それに、姉弟を持つ心境としてはな。」

「コッ！

キルア「…バロンって変な奴。」

「年上は敬えよー。」

キルア「その弟もこの試験に？」

俺、ブラコンですかいら…」

「ううん。

キルア「怪我でもされたら、相手を殺すとか？」

「いや。俺が死んじゃう…」

ア「？！アハハハハハ！」

「ええ？！大笑い？！酷くない？！」

キルア「あんた…面白…」

キルア「えつ？」

「…良かつた。」

ポフッ

「何で、悩んでるかは知らないけど、俺でよかつたらいつでも相談
に乗るぜ？」

キルア「？！…氣付いてたのか？？」

「うん。キルアの目が殺しをして居る奴らの目だつた。けれど、それを受け入れたくないような顔もしていた。荷が重いなら捨ててしまえ。」

キルア「・・・無理だ・」
つかつたら言つてくれ。」

キルア「・・・了解。」

チンツ

その時、Hレベーターから「ゴンたちが降りてきた。

(ああー!ゴン!隣の子達は一体、誰だい?!)

姉心で「ゴンを心配する・・・が。
目・少し距離を置こう・」

(駄目駄

キルア「?バロン?」
く。始まるみたいだし。」

「向こうに行

キルア「えつ?・・・一緒に行けないの?」

「んん?俺の弟も12歳でね?皆の側に居ると、心配ばかりしてしまう。離れて見守るよ。」

キルア「・・・バロン!」

チラツ

キルア「・・・またな!」

「二ツ

「・・・ああ。

そして、一足先にバロンは走った（サトツはもう走り始めていた）。

（足軽い。流石は、ユーローン。人間姿でも良い感じ。）

そう思いながら、サトツの隣へと付く。

サトツ「・・・。」

ジッ

「あの~良いですか?」

サトツ「はい?なんですか?」
テストではないですね?」

サトツ「・・・何故、そう思われるのですか?」

「・・・持久力テストだけじゃ、今回の受験生達は持久力テストだけで減るような奴らじゃない。」

サトツ「・・・。」

体力を見ているのでは?」

「多分、この試験で基礎

サトツ「・・・さあ?どうぞしよう?..」

タタタタタツ

（おう? !スピードが速くなつた・まあ、付いて行けますけど・）

ユニー『・・・大丈夫ですか?』
この姿が鬱陶しいけど・）

（うん!・

ユニー『ひどくないですか?主?』
ンク『御主人しゃまー!』

バ

（カーバンクル！）

です！先に行くなんて！』

（「ねん…今、『ゴン』に近づけないから…バンクの事は覚えてたよ？…

）

バンク『本当にしか？…』

（本当に。あ。外だ。）

サトツ「『ゴン』は“ヌメーレ湿原”。驕しの森といわれております。騙されないようこじつかりと付いてきて下さい。」

キルア「バロン！」

タツ！

「キルア。」（後ろに居るわ、『ゴン』ではないか！）

テンション上がる。

キルア「なんか、変な試験だな。あ。ここには『ゴン』・俺の友達！」

ゴン「始めて！バロンさん！」

「うん。始めて。」

「ないよ？何故？」（このう勘だけは鋭いからなあ。『ゴン』は…）

「ゴン」…失礼ですが、御いくつですか？」

「秘密。」

バンク『酷い

キルア「?.?.?.?.」

「ゴン、『俺、血の繋がつてない姉さんが居るんだが』。」

キルア「で？」

「ゴン、・・・、マロン、って言って、20歳で、ちょっと不思議な力を持つてるんだけど。」

「キルア、？」
「ゴン、霧雨気が似てるんだ。」

ジ
ツ

「気のせいだよ。俺は“マロン”なんて女知らないし、ゴン君とも始めて会つたんだ。」

「ゴン」「ええ？ そうかな？」
「そんなに似てるのか？」

「うんー何がつて訳じゃないけど、不思議な感じが。」

キルア「どんなんだよ！」
一強動が起つていたが。

ナリハニシテ

んだ；（人死んだよ？！）

問題なく進

ヒソカと密会

あれから、ヌメーレ湿原を問題なく走っていたが……。

(・・・血の匂いが濃くなつてきている。嫌だ・)

サスツ

マロンは自分の体を擦る。

ア「大丈夫か? バロン?」

「・・・ヒソカが後ろへと後退した・人を殺す氣だ・」
ジッ

キル

後ろを見据えながら言つ。

キルア「・・・バロン?」

「・・・俺、ヒソカを止めに行つて来る。」

ヒユツ!

キルア「?! バロン?！」

・やつぱり、似てる。」

ゴン「・・・

ゴン「・・・マロンも、人

が死ぬのが嫌いなんだ・」

キルア「え?」

キルア「・・・」(ゴン?)

レオリオ「うわあああ！」

ゴン「?! レオリオの声だ！俺も行く！」

ダツ！

キルア「？！ゴンー行くな！・・・クソ！・」

ヒソカ「クックク。どうしたんだい？まだ、全然、本氣を出して
いないよ？」

「止める。ヒソカ。」

ズザツ！

クラピカ「？！・・・誰だ？」

ヒソカ「バロ

（もう既に何人か殺されている・直せる？ゴニコーン？）

ゴニコーン『お姿が・ばれますよ・』

「君達は下がつて。」

レオリオ「俺達も戦う！」

せたくないんだ！行け！

クラピカ「すまない！行くぞ！レオリオ！」

（話し分かる子だ。）

「怪我をさ

レオリオ「・・・怪我をするなよ！・」

ダツ！

「・・・ゴニコーン！」

ゴニコーン『直ぐに。』

ヒソカ「？！・・・君は誰だい？“バロン”は？」

ジッ

「私はマロン。残念ながら、バロンは相手できない。でも、私が戦う。」キッ

ヒソカ「・・・“念”かい?」

「?何の事?」

ヒソカ(氣付いていない。)「・・・行くよ。」

ヒュッ!

(シヴァー!)

スッ

シヴァ『はー!』

マロンの姿は水色の服で、
水色の髪の女となつた。

ヒソカ「へえ?面白い念だ。」

「?何を言つて?」

ヒュッ!

ヒソカが掛かつて來た。

ユーローン『主!ゴンさんが近づいて來ます!』

「マジ?」

ヒュッ!

「バンク!」

避ける。

バンク『飛ふんでしゅね!』
るからね・ユーローン!』

(姿がばれ

「――『――』ある程度の処置は済みました。良いですよ~。』

「行くよー。」

ルコンチー

ヒソカ「？！」

マロンの姿が消えた。
レオリオ「加勢しに
！・・・つて居ない？！」

なぜか、不機嫌なヒソカから一発を食らひ事となつたレオリオ・（
無念！）

『――』「？」

vv（

（うわあつ？！）

ドサツー

ヒソカ（残念

サトツ「？！」

なぜか、サトツ

の近くに落ちた。

「痛い・・・・あ・すみません・サトツをさ・・・

サトツ「・・・一体、どうなつて？」
かりません・それでは・」

「分

そう言ひ、サトツの居た木の上から降りて、収穫生に混ざる。

（ハア・金髪の子と、黒髪の男の子・・・無事かなあ？）

キルア「――バロン――何時の間に戻つてきてたんだ？！」

「つい、さつさ。キルアは無事か？」

キルア「ああ。ゴンは？」

「・・・置いて来た。」

キルア「？！何で？！」

「うん？これも試験だ。ヒソカの注意だけは轡き付けといただけで戻ってきた。」

キルア「・・・」

スツ

キルア「？！バロン？！」

・・嫌われたかなあ？）

ヒソカ「やあ

「ひいつ？」

ズイツ

ヒソカ「クツクツク。君、一体、何者だい？」

「あ；レオリオ君。・・・生きてるよね？」

ヒソカ「うん それで？」

「・・・ここでは話せない。」

ブイツ

ヒソカ「でも、君自身も良く分かっていないんだろう？」

「そう。何時の間にかこの力は使ってたし。けど、ヒソカはこれが何か分かってるの？」

ヒソカ「多分ねvv」（無自覚でこの念の力。これは・・・欲しいねえ）

「へ、どうしました？」

僕が君の力を見ようか？

「・・・もつと、ましな方、居ません？」

ヒソカ「僕じゃ嫌かい？」

「はつきり言つたら？」

ヒソカ「クツクツクvv」

ゴーパーン『・・・主。離れませんか？』

（だね・）

ヒソカ「・・・本当にゴーパーンだ。」

＝「オッ

「？」

バツ！

ソカ「・・・見えるよ？」

「う・・・そ・」

後退する。

ズザツ

ヒ

ヒソカ「クククツvv気に入つたよ
「・・・俺、男だから・」

「・・・嫌。」

ヒソカ「クククツvv気に入つたよ
「・・・俺、男だから・」

「・・・嫌。」

ヒソカ「本当は、女の子なんだろ?」

試験始まるから行く。」

「忘れた。

ヒソカ「・・・団長に報告しようつづく」

(・・・だあーー怖かったーー)

ンク『大丈夫でしゅか?』

(何、あの人?・・・皆、見えるの?・・・)

ユニ『どうでしょ?つづく』

(ああー早く、始まれーー)

ゴツ!

キツ

(始まるー)

ニ『気をつけて下さい。』

ハハハハハ

バ

メンチ「どう?ブハラ?お腹の調子は?」

ブハラ「いい感じ。」

メンチ「第一次試験は料理よー。」

料理か・苦手分野かも・・・)

(

第一次試験に差し掛かつた!

いいハンター

(豚—豚豚豚—)

ながら、豚を探すマロン。

(豚がねーいつぱい居るよ；)

豚「ブギー——ツ！」

(せんと、じつじよつかなあ…)

豚の大群が近づいている。

(良し、行くか!)

豚「ピギヤー！」

れに潰されたら死ぬな。）

アーティシ!

ドサツ！

豚「ブギヤ————！」

一
あ

（けど、弱点がバレバレだ。大きな角で頭を守る。その頭を攻撃すれば良いだけだ。）

豚を全匹、倒した。

(セルビア語)

「ああ？・・・嫌だ。」

(あ。そり。シヴァ?)

イフ『脅すなよ・ヤツヤー、良いんだろ?・糞・』

心中で歌い

(・・・ゴーホーン。口が悪いのはさきつといフコートの所為よ。)

ゴーホイフコート?

イフ『・・・直しまわー。』

ボツ!

豚を適度に焼いた。

(良し。持つて行くのは一匹で良じよね?)

狐「キユーン。」

(・・・まあ、この森には熊や野生の動物が居るだらうし、置いておくか。)

そり、思い、一匹豚を抱き、戻った。

ブハラ「美味しい!」れも美味しい!うん!焼き方が丁度、良い!

(・・・凄い量、食べてるよ?・)

メンチ「あんた・それじゃー、試験にならなじでしょ・まあ、いいわ・次は私の試験内容よ?お題は“寿司”よー。」

(・・・寿司?なに、それ?オーディーン?)

デイーン『ジャポンといつ所に知られる料理ですが・魚が必要です・

』

(魚ねー。兎に角、川にでも行きますか・)

スツ

(・・・来て見たはいいものの、汚い川。シヴァ。綺麗にでれるへ。)

シヴァ『せひるんです。けれど、綺麗にして何をするのですか?』

(魚釣り。けれど、ゴンみたいに釣り道具はないしなあ。)

シヴァ『・・・呪に角、綺麗にしかれますね?』

(うんー。お願ひ。)

ア『水よ。美しく潤え。』

シヴァ

サラアッ
の水が綺麗になつていぐ。
れつそれまで汚れていた川

(わあーー。あつがとつー。シヴァー。ゴーパーンー。入るつー。)

ゴーパーン『・・・魚を取るのでは?』

(だつて・・・ね?)

ゴー『・・・おや?なんですか?あれ?』

ジッ

(?・何?)

狐『キューんっ。』

(れつれのへ。)

熊『ぐわあつー!』

「うわあつー!」

!』

魚『びびびびつ?』

「あ・魚。」（やつしの豚のお礼……かな？）「ありがとアーラー。

狐「ハハシ一」

タタタタタタッ！

（・・・・・）

【昔の記憶】

ジン「マロノ。知ってるか？ いいハンターは動物に好かれるんだ。」
ジン「マロノ。知ってるか？ いいハンターは動物に好かれるんだ。」
そう言つてジンの周りには色々な動物が寄つてきている。

「知つてゐるけど……ジンさんが居たんじゃ寄つてくる者も全部やつち
行つちやうよ。」

ジン「やつかー。マロノが気付かないだけで、ちゃんとマロノの側に
居るんだぞ？」

「えつ？」
ジン「……やけ

んと周りを見ていらん。」

「？」
【現在】

（あの時は分からなかつたけど、ジンさんは私の事を好いてくれる
動物もちゃんと居る。お前もいいハンターになれるよ。つて言おつ
としたのかも。）

熊が取つてくれた魚を持ち、試験会場へと戻る。

（良し。？あ。）「キルアー！」

タ

キルア「バロン?どうした?
魚。いらない?」

自分のキッキンに置いてある、大量の魚を見せる。

キルア「・・・あれ、全部、バロンが取ったのか?」

「いや。違う。けど、俺、一匹でいいからさ~要るならやるけど?」

キルア「本当?貰えると嬉しい。
えっと、他の子の分も?」

キルア「?・・・ああ。持つて行く。バロンも一緒に作ればいいだ
ろ?」

「いい・迷惑かけたくないから・
スツ

キルア「・・・待てよ。バロン!」
タツ

「ん。魚。俺から貰ったなんて言つなよ?」

キルア「何で?」

「何でも。ほら。持つて行つた。」

ア「・・・ありがと。」

キル

好き。
タツ!」

ユニー・・・世話

(五月蠅い・仕方がないでしょ？・本当に一匹でいいもん・捨てるのは嫌だし？)

ゴニ『はいはい。 そうですか。 たばかないのですか？』

(たばくよ・)
に包丁を入れる。
そして、魚

(新鮮だから、腸をとつて、鱗もとつて、血を綺麗に洗い流して・。
・？)

ディーン『確かに、一口サイズに切るんです。 骨以外の部分を。』

(茹でたりしないの？生のまま？)
イーン『生のままです。』

(ええ？そういう物なんだ・知らない・一口サイズつて人によらない？)

ディーン『約でいいです。』

(はいはい・)

適当に一口サイズにたばく。
これを？)
(・・・

ディーン『『飯の上に乗せるんです。 因みに『飯も一口サイズ。 ジヤポンでは握ると言われるそうです。』

(握る？・・・おにぎりみたいに？)

『ディーン』それは？・

（・・・魚を乗せれるよつ・・・か・・ビッグだひつへ。）

一応、『飯を握つてみる。
じゃー、食べ難いかも？』

『ご飯を握りながら考える。
で収まりやすいサイズ？』

（もう一個、握る。
い？それに魚を乗せる。）

乗せてみて、形やらを見やる。

（・・・これが寿司？）

まだまだ、いびつな寿司が田の前にあつた。

（・・・他にヒントはないのかなあ？）
試験官を見やる。

（・・・あれ？手にお箸を持つてゐる。・・・お箸で食べる料理でさ
らに一口。そして、箸で摘めるような柔らかさと固さで、小皿の
に入っている醤油を付ける大きさ。）

メンチの様子を伺い、考えた一品を作り出した。

やりました！

そして、ようやく、納得のいく一品を作り出し、試験官へと持つていく。

メンチ「あら？ 一番乗りが男だとは思わなかつたわ。」（それも、かなりのイケメン！）

「色々と試行錯誤をしてみた結果、これが出来ました。」

力タンツ

メンチ（形は良いわね。後は。）

パクツ

「・・・どうでしょうか？」

チ「驚いた・美味しい・」

メン

「それは、良かつたあ・貴方のヒントを頼りに、一生懸命、作つたので・」

メンチ「私のヒントだけでこんなに美味しいものを？・」

「失敗作もかなり多いですけど・けれど、残すのは悪いので、俺が食べますけど？・」

メンチ「・・・あんた、名前は？」
・バロンといいます。」

メンチ「合格よ・洞察力に、研究力に努力・それで生み出した寿司

は天才的ね！」

「お褒めいただき光栄です！それでは、俺は戻ります！」

ペ口ッ！

メンチ（・・・婿に貰おつかしら？）

ブハラ「メンチ？！」

ブハラはなんとなく、メンチの考へている事が分かつてしまつた。

（さてと、残飯整理でもしますか！）

カタタタタタッ！

見事な包丁裁きで魚を叩いていく。

メンチ（何を作つて？）

「・・・あの？お湯つて使って良いですか？」

メンチ「？！・・・ええ；いいけど；何を作るの？」

「？お茶漬けです！メンチわんもどりですか？」

ニ口ッ

メンチ「そうねえ。」

ブハラ「メンチ！」

メンチ「分かつてゐるわよ！・・・ちょっと、言つてみただけじゃない？；

「

「あ・仕事中でしたね・すみません・」

お湯を沸かし、かける。

「 いたださまーす 丶 丶 丶 」

クバクツ！

メンチ（ああ・美味しそう・）

二二三

（美味しい！これが、お茶漬けか！）
勢によくかっこむ。

(ふう！お腹いっぱい！他の人たち、戻つてこないなあ。)

チラツ

（・・・寝るか。）

スツ

メンチ「つてバロン！・・・寝るの？」

「あ。はい。長髪をそつなので……。いけませんでした?」

キヨトシ

メンチ「――――――」 おれか一ね・・・おやおんなじこー。」

「はー。おやすみなさいvvv」

クテツ

八〇

そう言つたバロンは、とても早く寝付いた。

そして・・・周りが寄りいつそう、騒がしくなつた頃・・・。

「ンンッ？・・・何があつたんだ？」

ムクッ

メンチ「悪い！お腹いっぱいになつちやつた・・・

「あ。もしかして、試験終了？」

キルア「あ！バロン！・・・それがよ？一人しか試験合格者、居ないらしいんだ・・・」

「へえ！凄いね！誰だろ？？」

メンチ「だから、何べんも言つてるでしょ！私の試験合格者は302番しか居ないわ！」

「・・・302番？・・・俺？」

キルア「・・・じつやつて、どう聞いてもバロンだと思つナビ？」

「俺、そんな事、聞いてない・・皆が落ちるなら俺も落ちる。」

キルア「つじどなんなんだよ？・・」

メンチ「バロンvvv 貴方は合格よ？」

「・・・断ります。」

メンチ「・・・え？」

他受験者「・・・ええええ？」

「・・・俺だけ、ここで受かっても楽しくないし、嬉しくないので。
」（ましてや、『ゴンの夢を私がたつたら意味がない。』）

メンチ「そんなんあ？」

ネテロ「メンチよ。合格者一人とはちょっと厳しすぎるんじや？」

レオリオ「な・・・なんだ？！？」

ヒュウッ

ドゴッ

ネテロ「ホッホッホ。それに、たかが料理に力を入れすぎなのでは
？メンチ？」

メンチ「つ・・・すみませんでした。試験官失格です。」

「そんな！メンチさんはとてもいい試験官だと思います！俺はメン
チさんが居なくなるのは嫌です！」

メンチ「つーバロン！」

ネテロ「やつたのぉ？他の試験をこの者達に『えてみては？』

メンチ「他の？・・・それでは、ゆで卵！」

「ゆで卵！俺、大好きです！」

「パツ！」

メンチ「／＼＼＼＼ もう一回、言って！」

「？ゆで卵！俺、大好きです！」

「コツ！」

メンチ（くうつ！／＼＼＼＼ 可愛い！抱きしめたいわ！）

避ける姉

あれから、私達はゆで卵を作るために断崖絶壁へと来ていた。

「ひゃー。かつこじいー。この下に卵があるんだ！」

キラキラッ

二十歳には見えない綺麗な笑顔で、崖の下を眺めている。

メンチ「下に蜘蛛の卵があるわーそれをとつて戻つてくれれば合格よー！」

「俺もいく！」

メンチ「え？！バロンは私と一緒に・・・。」

「メンチさん。俺の有志を見ててくれださいー。」

ヒコッ！

キルア「俺も続くぜー！」

ヒコッ！

「わあーすつ！」こ量ー！」

キルア「よーバロンー！」

スタッ！

「来たんだ！キルア！これが、蜘蛛の卵らしによ。」

キルア「みたいだな……おい！バロン！後ろ！」

「？！」

蜘蛛「ぐわあああああ！」

「……ありやりや……。来たね。」

キルア「何、やつてるんだ！バロン！行くぞ！」

「……先に行つて？」「いつを足止めする。」

キルア「？！お前、何を言つて？！」

「だつて、どう見たつて私を狙つてるでしょ？キルアに被害は出させないし、ここにも怪我を負わせない。」

キルア「……バロン？」

（さあ……自分を試す時が来た……）

ドクンッ！

ジン『いいか？マロン？お前がその力を發揮するのは……いつかちゃんと見切つて発動させるんだ。』

（・・・「めんね？・・・ジンさん。・・・私、こんな処で使つか
せつ。）

ヒュウウジー！

風が吹いてくる。

キルア「・・・上へ持つてからなん?」

ヒュウジー！

「・・・」了解。

一ツ

蜘蛛「ぐええええええええ！」

ヒュウジー！

蜘蛛が私へと向つてきた。

「時を止め・・・？」

ヒュウジー！

ヒュタツ

蜘蛛が・・・周りの時を止めた・・・。

「・・・『あんな?』」

ヒュッ！

上へと向ひ。そして、時は動き出した。

（・・・ほぼ完成・・・。けど・・・）これは体力・・・減る。）

ドサッ！

キルア「！バロンッ！」

キルアの声は・・・氣絶する前に少しだけ・・・聞こえた気がした。
・・。

あれから・・・飛行船に移つたらしい。

「・・・んつ・・・んんつ・・・あれ？・・・」「は？」

ムクッ

キルア「あ。目が覚めた。」

「ゴン」「あつひ〜〜く、よく寝てましたよ？」

ジッ

「一。ゴン君ー・・・ああ・迷惑をかけたようだね。」

ムクッ

キルア「いや。にしても、軽いな？バロン？」

「……つてキルアが運んだの？面白い・それじゃー、俺、他の所にいく。」

スツ

「ゴン」「……なんで、バロンさん。俺を避けるの？」

「……何の事だい？ゴン君？」

ジツ

「ゴン」「……ヒンカから、レオリオやクラピカを助けに最初に行つた時も、その後の試験も、俺を避けていた。……なんで？」

「キルア」「話せば？本当の事？バロンには……。」

「キルア！……余計な事を喋るな。」

キツ

「キルア」「は？何で？……まあ、話したくないんだつたらいいんだけど？……」

「……俺は、ゴン君を避けた覚えはない。だが、近づく気もないんでね。」

キツ

「ゴン」「……分かった。」めんなさい。」

k i s s m e p r e a s e

そう言つたゴンは立ち去つて行つた。

キルア「・・・どうしたんだ? バロン? お前・・・変だぞ?」

チラッ

「別に。・・・ゴンの所に行つて良いよ?」

スツ

キルア「つて、バロンはどうあるんだ?」

「・・・分からない。・・・疲れてるし、もう一眠りしようかな?」

キルア「・・・俺になんか、隠してる?」

「? 何を?」

キルア「分からない。けど、ゴンには話せず、俺には普通つて変じやん? ゴンは俺よりも人懐っこいだろ? ・・・なんで、避けるんだよ?」

「・・・やつぱり、バレバレ?」

キルア「ああ。話してみろよ?」

「・・・まだ駄目なんだ:・・・本当に」「あん:・・・

キルア「・・・辛かつたら言えよ?」

「サンキュー。」

そつぱつて、キルアは「ゴンの後を追つていなくなつた。

(・・・駄目だねえ・あの年の子に近づいたら、ばれるのは私が良く知つてゐ・やつぱり、少し距離を置くか?・)

ヒソカ「バ・ロ・ン▽▽

ヒヨウイツ

「わざやつ?・・・・ヒソカ・・・・なんか用?・・

ヒソカ「クツクツク 君、『ゴンとはどんな関係なんだい?』

「・・・義理の姉弟。つて、何で、ヒソカに教えなきやいけないの?・

ジツ

ヒソカ「ゾクゾクゾクッ ねえ?・・・・わざのゆで卵の時。何で倒れたの?」

「疲労。つて、顔近いんですけど?・

ヒソカとマロンの顔の距離は10cmもない。

ヒソカ「・・・マロンって無意識に男を誘うの得意だら?」

「・・・は?」

チユツ

「?...むうつ?...」

ドンドンッ!

マロン(バロン)は、なぜか急にヒソカから、猛烈な口づけをされた。

クチュツ

スルツ

「舌まで入れる?.../.../.../.../... 普通?.../.../.../.../...」

ゴシゴシッ

私は唇を自分の袖で拭き取る。

ヒソカ「クツクツク。・・・どうやら、キスは初めてじゃなー」とうだね?」

「どうだって良いでしょ?...近づくなー」

キシャーッ!

ヒソカ「アハハハ! 本当にそそられるよ。・・・寝るなんなら僕の所

に来ないかい？」

「行くか！？」

バツ

ヒソカから距離を置いた・・・その時。

ドンッ！

「？！あ・」めんな・・・ギヤー？！

ギタラクル「カタカタカタッ。」

「3・・・301番？・」

目の前には針山男・・・301番が居た；

ヒソカ「ちょっと。ギタラクル。その子。僕のお気に入りなんだ。
返してよ？」

「うつ！

殺氣を思いつきり出す。

ギタラクル「カタカタカタッ。」

「・・・嫌みたいです。」

ベーツ

ギタラクルの後ろに隠れながら、ヒソカに舌を出す。

ヒソカ「・・・その唇にキスしたばかりだから、その舌がどの位、僕に反応するか・・・」

「だあああ／＼／＼／＼・喋るなー変態ー」

キツ！

ヒソカ「ギタラクルは怖くないのかい？」

「・・・なんでだろ？姿や外見はともかく、拒絶反応が出ないから。」

ヒソカ「・・・僕には？」

「出る！だから、近づくなー」

キシャーッ！

ヒソカ・・・少し落ち込む。

「フンッ！・・・あの・・・ギタラクルさん？・・・ビーッして助けてくれるんですか？」

拒絶反応は起こさないが、ややこじらかと話すマロン。

ギタラクル「・・・俺も興味を持ったから。」

「・・・私って変なんですか？」

ギタラクル「・・・そりと/or?」

「それじゃー、ギタラクルさんだつて変ですよ！そんな格好する意味があるんですか？私みたいに簡単に変装はできないんですか？」

ギタラクル「・・・へえ？変装だつて分かるんだ？」

「一応、けど、何で、変装してるかまではわからないよ？」

ヒソカ「イルミはね。痛いの好きな変態だから<<」

「・・・絶対に嘘だ！」

トリックタワー

私はあの後、寝る事が出来ず、次の試験場へと降り立つた。

リップバー『いいは、トリックタワー。一週間以内に地上に降り立てば合格だ。』

（一週間か。・・・どうやって降りるんだろう？）

ヒソカ「バロンvvv

「?何?」

ヒソカ「・・・下で会おう?」

カタツ

ヒュッ

（?・!・・仕掛け扉。・・・ヒソカ、わざわざ私に?）

ヒソカが私の事を思つてくれたのに・・・少し悪寒が走つた；

（・・・よし!行くか!』ゴン。キルア。・・・頑張つてね?）

カタツ

ヒュッ

ドサツ

「ブフツ？！」（・・・だ・・・誰か居た？：）

ギタラクル「カタカタカタツ。」

「・・・あ。ギタラクルさん。今日は。」（は一人のみなんですか
？：）

ジイツ

ギタラクル「カタカタカタツ。」

「それで・・・悪いんですけど、胸を触つているのは離して下さい。」

パツ

ドサツ

「すみません。あの・・・変装を解かないんですか？」

ジイツ

イルミ「・・・解いていい？」

「いいよお？」

ズルツ

「うわあ・・・それ、子供の教育に良くない抜き方だよ？・・・

そして・・・。

イルミ「すっかり。」

（うわあ／＼／＼／＼綺麗な顔。）「あの、何で、変装なんてしているんですか？」

イルミ「・・・進みながらでいい？」

タツ

「・・・それで・・・なんで？」

チラツ

イルミ「・・・弟が試験を受けてるんだ。」

「あー私もー義理のだけど・・・名前は？」

イルミ「キルア。」

「・・・似てないねー。」

イルミ「・・・バロンの弟の名前は？」

「私はマロンだよ。義理の弟の名前は『ロン。』」

イルミ「・・・仲、悪いの？」

「まさか・弟離れをするために・・イルミちゃんへは？」

イルミ「……イルミで良じよ、俺は……弟を連れ戻しに。」

「……家出しているの? キルア?」

イルミ「正解。困るよねえ? 親とか半殺しにしたらし。」

「? ……それか、悩んでたのは?」

イルミ「……何か聞いたの?」

「うーん? 特には……けど、悩んでるんだなあつて?」

イルミ「……キルアの事、好きなの?」

「? ……弟としては好きですか? けび? 手つてあげたいって感じ?」

イルミ「……余り近づかないでもらえない?」

「それは私の自由ですよ? それに、キルアを縛り付けるのは家族でも許されない事なはずですよ?」

「口」

イルミ「……変なの。」

「? なつですか?」

私達は進みながら、敵を倒していく。(もちろん、殺していない)

「……だいぶ進みましたけど……分かり道です。」

イルミ「見れば分かるよ。」

「……ですよねー?」

シクシクツ

イルミ「……進みたい?」

「……左。」

イルミ「それじゃー、右で。」

「?……イルミわざ……私の事……嫌いでしょ?」

シクシクシクツ

イルミ「……別に。行かないなら、担べナビ?」

「行きますけどー……なんだか、イルミさんって、私を虐めるの好きになつてしまふ?ヒソカさんに似てきますよ?」

イルミ「……俺が?嘘だー。」

「うわつ……めつた、棒読みーもつ良いです!行きましょうー。」

イルミ「……だつて、君つて俺よりも年下だから、妹が出来たみたいで……少し虐めたくなるんだよね?」

「……確かに二十歳ですし、妹と思われても仕方がないほど子供

つぱいけど……イルミちゃんの妹は……嫌ですー。」

プリプリッ

ちょっと、怒りながら、前に進んでいく。

殺人鬼とのギャグ

「…・・・俺もマロンが妹は嫌だなあ？・・・犯せなさそだ
し・・・」

バ
ツ

イルミ……だってさ？俺、弟いっぱい居るけど、その誰かの婚約者となつて、結婚されでもされたら、皆、執着心強いだろうから、犯せないよなあつて？」

「／＼／＼／＼ イルミさん！ それ、 真顔でセクハラ発言は止して下さい！・幾ら、 私でも引いちゃいますよ？！／＼／＼／＼

イルミ「え？ だつて、俺、マロンの事、気に入つたし？ 妹になつちやつたら手出しできなじゅん？」

「だーかーら！；私は、イルミ家の誰かと結婚する仮定で話すの止めてもらえません？！」

イルミ「・・・ヒソカの奥さんも嫌だよ?」

「私だつて、あの人妻は嫌です！」

一人は、囚人をなぎ倒しながら、そんな面白い会話を繰り広げつつ前へと進み続けていた。

そして……。

ガシャンッ！

「？・・・何？」「？」

ジイッ

ザルク「クククッ。随分とかわい」ちゃんが居るじゃねーか。ケケケ。」

「・・・うえ・気持ち悪い奴が出てきた・」

イルミ「・・・あんな奴とも結婚して欲しくないなあ。」

「もういいから・お兄ちゃん思考止めてよ・」

リップー『そこに居る囚人たち5人と、君達一人はデスマッチをしてもらひ。』

「・・・あの、どちらかが死ぬまで続ける奴？・」

リップー『そ、そして、二人とも、一回は闘わなければならぬ。それに、少しでも傷付けられれば、君達の時間は奪われ、そいつらは晴れて自由の身となれるつて訳だ。』

「なるべく・・・人を殺すのは嫌いだけど、やらないと進めないしね・」

キース「クッククック。俺は女をやるぜ？」

ウォン「ずるいな！俺にもくれよー！」

ベーン「あの女の体を引き裂いたら、どんなに綺麗な肉が飛び散るんだろ？　ヒヒヒ。」

ユベル「おいおい。肉にしたら、他の事に使えないだろ？先に俺だな！　俺を体に叩き込んで轟り殺す！傑作だ！」

ザルク「それよりもあの女。俺達を見て、怖気づいても居ない。ああ。見てみたいな。あの顔が、苦痛で歪むのがvvv」

「・・・判明。どいつもこいつも気持ち悪くて、自分の罪を罪だと思わない馬鹿しかいない。」

ベーン「言つてくれるねー。その口の中に納まつてる小さな舌は俺のコレクションに追加してあげるvvv」

「ゾワッ・・・イル！」先に行つてもいい？こんな奴ら、見てるのも触るのも嫌だ：」

イルミ「いいよ？けど、無理しないでね？あんな奴らの血にも汚れて欲しくないし・・・なにより奴ら念能力者だ。」

「？念？」

キース「ひゃーひゃひゃひゃひゃー！あの女、念能力者も知らないぜ？なんなら、俺達が、手取り足取り、腰取り、体取りを教えてやるぜ？ひゃひゃひゃひゃひゃつ！」

「・・・ねえ？一番手。誰？早く済ませて欲しいんですけど？」

ゴベル「それじゃー、やつぱり俺だろ！体がガクガク震つ狂う鳴かせてやるぜー！」

スタッ

リップー『・・・試合、始め！』

ゴベル「てやー！」

ヒュウ！

ウォン「いっけー！殺せー！」

キース「俺達の前で犯し殺してやれ！」

ザルク「・・・？！ゴベル！下がりやがれ！」

ベーン「へビうしたんだよ？ザルク？」

ウォン「まだ、試合は始まつたばかりだぜ？止めるには惜しい。」

ザルク「馬鹿野郎！見て分からないのか？！あの女・・・念を理解してないだけで・・・そうとうの念使い者だ！・・・」

キース「？！なんだつて？！」

4人が、再びマロンとゴベルの戦っている競技場を見渡すが・・・

ゴベルの姿だけ消えてなくなっていた。

ベーン「・・・ゴ・・・ベル?」

ウォン「・・・おこ?...女?...」ゴベルを何処にやりやがった?」

「・・・ギャー、ギャー、うるせーな。あの男なら、俺の腰袋の中だが?」

二タアツ

そう言つたマロンの瞳は、深い深い闇の色へと化していた。

キース「・・・う・・・嘘だろ?」

「まあ。直接、口に入れるなんて、汚いマネはしないが・・・。

ドシャツ!

マロンが何かを続けようとした瞬間・・・血と骨と衣服しか残つていない何かが何処からともなく降つて来た。

ザルク「うづえつ・・・肉の・・・塊?」

「ああ。流石にまずすぎた所為か、殆ど消化できないまま出てきやがった。糞?」

ベーン「・・・お前は一体・・・何者なんだ?」

「・・・俺は、ドルチH。何でも食うのが好きなんだが、こいつ自身では食えないから、時空の中で食ってやつたのさ。時空の腹もこいつの不味さには嫌気がさしたみたいだがな？」

「ヤツ

ウォン「化け物・」

眠りに落ちた・・・

「ハツ？！・・・化け物・・・だと？・・・お前らにだけは・・・
言われたく・・・なかつたな。」

ドサツ！

イルミ「？・・・マロン？！・・・

マロンは会場ど真ん中で、倒れてしまった。

イルミ「？・・・マロン！早く、田を覚まして！・・・

リップー『無い忘れてましたが、リング内で倒れてい、生きている状態なら、次の人物に回します。』

ザルク「ヒヤーハツ！行くぜー？！小娘！・・・

バツ！

イルミ「マロン！・・・

ヒュウツ！

イルミ「？！・・・

キース「？！なんだ？！」

シヴァ『・・・あら？・・・主は眠つてこるのですね？まったく。

無茶をなさる。ドルチェが勝手に出るからですけどね。』

さつさまで倒れていたマロンは、髪の色が水色となり、耳も尖がり、瞳の色も綺麗な水色となっていた。

ベーン「・・・一体・・・どうなつて?・・・

シヴァ『・・・審判さん? 体はマロンのままなのですから、今から、ここを離れてよろしいですか?』

ジッ

リッポー『・・・ああ・構わない・・・

シヴァ『それでは、私は退場しますわ。イルミさん・・・でしたよね? 後はお願ひします。』

スツ

イルミ「・・・了解。」

ザシユツ!

4人「ぐわあつ!・・・

そして、残っていた4人の男達を瞬殺した。

シヴァ『・・・イルミさんは悪いのですが、私はこの姿では進めません。なので、マロンさんを運んでもらいたいのですが?』

イル〃「・・・ここへ。」

シヴァ『頼みます。』

ヒコウツ

ドナツ

そして、マロンへと戻つ、イル〃へと倒れこむ。

イル〃「?—マロン?—」

「・・・スー・・・スー。」

マロンは心地良さそうに、イル〃の腕の中で眠る。

イル〃（・・・寝てる。・・・相当、力を使いすぎたんだ。）

スツ

ゆづくと抱き上げて、進みだし、その振動も酷く静かな物にした。

そして、トリックタワーを抜けた。

リップー『302番。301番—共に、ゴールー一位と三位です。』

ヒソカ「お帰り。イル〃。・・・マロンと一緒に一緒だったんだね？」

ジイツ

ヒソカは、イル〃の腕に抱かれ寝ている、マロンを眺めながら囁く。

イルミ「……起ひきないでよ……疲れてるみたいなんだ。」

ヒソカ「……と座り、マロンが寝やすこよひてする。

ヒソカ「……マロンのやんな細い腕に抱かれて寝るよりも、僕の腕の方が良いんじやないのかい？」

イルミ「五月蠅い。……黙つて。」

ジイッヒ、マロンの顔を除きじまだまま、イルミはぴしゃりヒンカにいつ。

ヒソカ「……惚れたね。イルミ？」

イルミ「？！……そうかもね。……妹っぽいって思つてたけど、無理したりするのを見て、守つてあげたいつて思つたから、まさかとは思つたけど……惚れたかあ。」

殆ど、無表情だが、マロンを見て居る時にだけ、酷く柔らかい顔をしていた。

ヒソカ「……彼女は、不思議すぎるからね？……誰かが、支えなきや。壊れそうだ。」

スッ

パシッ！

ヒソカがマロンに触れよつとしたので、イルミは、蚊を叩き落すよう呟く。

ヒソカ「・・・クックク。痛いじゃないか? イルミ「・・・もせ
そろそろ変装しなきや、正体がばれるんじや?」

トリックタワーから人がやつてくる『分配』がある。

イルミ「・・・」

ヒソカ「・・・両手を使つのこ、マロンを支えられるのかい?」

ニタツ

イルミ「・・・マロンも起つて、変装させなきや。」

ヒソカ「見えなくすれば良い」

そういうて、ヒソカはマロンに向かを被せて、自分の膝に寝かしつけた。

ギタラクル「カタカタカタツ。」

ヒソカ「返せつて? その格好で、怪しまれないのかい? マロンと一緒にいて?」

ニヤニヤツ

ギタラクル「・・・カタカタカタツ。」

スツ

ギタラクルはヒソカに何かを言い離れる。

ヒソカ「クツクツク。随分と執着してるねえ。・・・ 一体、イルミ
に君は何をしたんだい？」

いまだに自分の膝を使い寝ているマロンを“薄っぺらな嘘”で隠し
た人物を見やる。

そして、ある程度、時間がたつた頃……。

ヒソカ「……マロン？……マロン。……起きなこと舞つちゃうだ？」「

「『さやつ？……あれ？……なんで、私、ここに？……』

ジイツヒソカを見やり思つ。

ヒソカ「氣絶して、眠つてたんだ。姿は戻しといたけど、変身しないとばれちゃうよ？」「

「？…本当だ！…」

やつまつて、バロンの姿へと戻つた……その時！

『ン』「うわあああ！」

『サドサツ！

「…『ン』とキルアたちだ！……あれ？何で、こんなに人が集まつてゐるの？」「

ヒソカ「だつて、もう試験は終わりだ。」「

「…えええ？…私…そんなに長い間、寝てたの？…」

ヒソカ「うん 眠り姫みたいだったから、もつ少しでキスをする所
だったよ?」

「コオツ

「……って? イ……ギタラクルは?」

チラツ

ギタラクル「! ……カタカタカタツ。」

「よかつたあ。 ……って; 一人とも受かつてゐからいいに居るの
か?」

そつと、胸を撫で下ろすマロン。

ヒソカ「……ねえ? マロン? イル?」の事、どう……。」

リップー『ええ! では、次の試験会場へと向いますー。ゴールした順
に、森の中に入つてくださいー。』

ヒソカ「……面倒だなあ。」

スツ

ヒソカはそういうながら、ナンバープレートを引き、森の中へと消
えていった。

「? ヒソカ……何を言いかけたんだろう?」

リップー『302番！ナンバープレートを引いて、森へ！』

「・・・つて！俺は一番手？！・・・イルミー（自分で連れて、

急いで外は出たであなし、徳を見やる)

ギタラクル「“頑張つて”。」

イルミ（ギタラクル）は、口の形で、そう書つた。

「！・・・。」

タツ！

ヒロシ！

そして、マロンも森の中へと消えた。・・・が。

ボフツ

ヒソカ「やあ
待つてたよ

なぜか、少し進んだ所に、ヒソカの厚い胸板が・・・。

「・・・なんで、こんな所に居るんですかあ？・」

もう、諦めたといわんばかりに、元気なロメロ。

ヒソカ「言つただろ?待つてた。つて。・・・ね?何で、あんなに

疲れてたんだい？

ジイツ

「多分、私が操りきれない奴が勝手に出てきたんだよ…」

ヒソカ「操れない?」

「うん・私だつて、この力を完璧に使えるわけじゃないから…」

ヒソカ「…使えないの?」

「うん・…どつちかつて…いと使えないのが多いぐら…・私の知らないのも居るし?…」

ヒソカ「…・知つて居るので、使えないのは?」

「?・・・うーん・フニックスとペガサスは使えないなあ…」

ヒソカ「へえ “フニックス”に“ペガサス”かあ。」

「あー・イルミー・」

ヒソカ「?・・・なんで、来たのさ?・イルミー?」

「睨まなくつても良いじゃん!ヒソカ!あー・トリックタワーの時、
ありがとうvv」

イルミ「…・別に。・・・もつ平氣なの?」

イルミはそう聞き、貴方の顔を覗き込む。

「うん!平氣!本当にありがとう…」」で受かんなかつたら諦めて

たよー・」

イルミ「え？・・・諦めないでよ。期待してるんだからっ？」

「マジー嬉しい！イルミにそいつ言つてもうりえんとなんだか元気にな
るvvv」

私は、イルミと仲良くなつた。

ヒソカ「・・・マロン。番号、何番だい？」

「どうやら、気を引きたいらしいヒソカさん。

「？・・・分からぬ番号だよー・けど、人物は把握してるから、
きっと、三兄弟の一人だな！つて予想を立ててるのー。」

そう、胸を張り言つ私。

ヒソカ「すぐに取りに行くの？」

「ううん。何で？」

ヒソカ「僕が、念の修行、手伝つてやろうと思つてねvvv」

「・・・遠慮しとくー。」

マロンは、大慌てで断る。

ヒソカ「・・・なんで？その力、使いこなしてみたくないの？」

「うん。全然。あつてもなくとも私はいいし？」

マロンは素っ気無く、ヒソカを振った。

イルミ「・・・俺が教えようか？」

「本当に良いの。お父さんに言われてるの。私のこの力は普通の人と違うから、普通の人に教えてもらうな。って。」

ヒソカ「・・・僕達、普通かい？」

「・・・私よりかはね？：」

そんな会話をしながら、試験は始まった。

キルアとの遭遇

あれから、ヒソカに念についてを教えてもらつた。

学べば、学ぶほど難しい物だと言うのが分かつた。

それを私が使えるなんて、思いもしなかつた。

イルミがヒソカと自分用のナンバープレートを取りに行つてしまつて今はヒソカと二人きり；

「・・・ヒソカってむへ？どうして私の事、気に入つてるの？」

ヒソカ「・・・自覚はあるんだ？」

「あんまり。けど、当たつてるでしょ？？」

呆れたよつて告げる。

ヒソカ「うふ。かなりねvv君の義弟にも興味があるよ？vv」

「ええ？..」「コンは黙目？」

複雑な顔をしながら告げる。

ヒソカ「そろそろ受験者、全員、来た頃だね？どうするんだい？いくのかい？」

ヒソカがマロンに尋ねる。

「うん。いく。私もナンバープレートを取りに行かないと…私、ヒソカの事、苦手だつたけど好きになれた！ありがとうね？」

「こやかにヒソカに告げて、立ち去つたマロン。」

ヒソカ「…・やつぱりいいねvv」

更に氣に入られたマロンはヒソカの様子に氣付かず居なくなる。

（何処だらう？アモリ、イモリ、ウモリだか？…）

森を詮索して居る…と。

キルア「…・バロン？」

キルアと出会つた。

「キルア！久しづり！何番？」

「コニコとキルアに問う。

キルア「…・バロンは？まさか、俺？」

「まさか！；アモリだか、イモリだか、ウモリつて言つ奴の番号…」

苦笑しながら告げる。

キルア「あ…・多分、俺もそのうちの一人。」

「良かつたー。一人で心細かつたんだ！……ねえ？「ゴンつて……誰？」

キルアを見つめながら小声で問う。

キルア「？・・・あいつ、運ないんだぜ？ヒソカなんだ！」

「・・・そつか。けど、殺さないと思うよ？ヒソカ、ゴンの事、気に入つてたから。」

キルア「嫌・気に入られてるのは、バロンだつて一緒だろ？・・・」

「そつなのかな？あ！けど、キルアも気に入られてるから、いつかはやり合つかも・・・」

キルア「・・・ああ・覚悟はしつつもりだよ・・・」

「んで？どうする？」の後。「

キルア「んー？バロンってさ？不思議な奴だよね？」

「・・・突然なんだ？・・・ヒソカにも言われたぞ？・・・」

キルア「ハハハハハツ！ヒソカに言われたら終わりだな！」

「？！そんなに笑うことないじゃんか！」

キルア「だつて！変！ハハハハハツ！」

「・・・ねえ？キルアの事も・・・知りたい。」

キルア「……いいぜ？ 何を知りたい？」

「お？ 素直。 それじゃーね？ ……誕生日！ 教えてよー。」

キルア「？ ……知つてどうする気？」

「？ 祝うに決まってるだろー！」

「ココと笑いキルアに告げる。

キルア「… 7月7日。」

「ラツキーでーだね！ セヴンセヴンなんて素晴らしい誕生日じゃないか！」

キルア「… バロンの… 誕生日は？」

「… ない。」

キルア「え？」

「ないつて言うか覚えてないんだわ。 ……生まれてきた時の事、知らない。」

キルア「… 聞いたら不味かった？」

「全然！ 今が、幸せだから！ だから、キルアにもちゃんと幸せになつてほしいんだ！」

「ええ？俺は、恥ずかしくないし？」にしても、キルアって、身長、意外と高いな？何ぼ？」

キルアー 158cm。ハロンは・・・もう伸びないよな?」

キルアー抜かしたら付き合ってみ?

「…はい? キルア? …今の言葉…聞こえなかつたけど?

キルア「……バロンの身長を抜かした時、俺と付き合つてよ?」

「……キルア、自分が何を言つてゐるかわかつてゐ？……俺、男だよ？」

キルア「・・・ああ。知つてるぜ?・・・けど、好きなんだよなー。」

「・・・ん。覚えとく。」

キルア「…………拒否しないんだな？」

「だつて、キルア。本気なんだろ？それを背くつもりはない。」

キルア「・・・もう一つ、バロンに聞いていい?」

「？今度はなんだい？誕生日と星座を聞いても答えられないからね！」

キルア「・・・バロンって実は女だろ？」

「？・・・キルアー・それはないわー・俺が女？！見える？・」

キルア「バロンからは女独特の匂いがしてる。ゴンよりかは鈍いけど、ゴンと一緒にいる時はしてない。まるで、ゴンには自分の招待をばらせないようだ。そうだろ？マロンさん？」

「・・・何時から・・・気付いてたの？」

女言葉に直しキルアを見つめながら小さく問い合わせる。

キルア「何時からって訳じやない。おかしいなって思つてたから。ゴンを避けるのが。」

「あー・避けないが正解だつたか・」

落ち込みうな垂れる。

キルア「・・・どうして男装を？けど、胸・・・本当にない感じなんだけど？」

キルアはマロンの胸を見つめながら真面目に聞いかける。

「そんなに見ないでよ・訳ありなの。」

キルア「……」めん・俺、余計な事ばっか言つて……

キルアはさうやう詮解をしたようだが、今はそのままこじつておいつ。

キルアとのデート？

まあ、あれから色々と合ったが、キルアと森の中を見て回っていく。

「・・・どうする？後、付けて来てるけど？」

キルア「あれ？気付いてたんだ？」

バンク『僕が見てきたんだから当たり前でしゅー。』

「勿論！キルアには負けられないからね？」

笑いながら森の中を歩み進める。

キルア「・・・仕掛ける気はないようだな？」

「いっちから行く？」

キルア「俺はいいぜ。行くぜ？」

言つと二人はその場から姿を消して・・・。

イモリ「お兄ちゃん・やつぱり子供一人をやるなんて！出来ないよ
！」

ウモリ「けど、アモリ兄ちゃんの言つ事を聞かないと怒られるぞー。」

アモリ「お前らー！子供一人に男一人だぜ！何をそんなに言い合って

「

るんだ！」

「やうだ！ そ、うだ！ も、つとはつきり行動にしやがれ！」

アモリ「ほら！ 敵もいひつてゐる事だし！ 仕掛けるなら今だ——
——？ ！ ？ ！」

キルア「やうやう。今が一番、仕掛けるならいいよな？」

「うんうん。兄弟喧嘩もいいけど、来ないならこっちから行くけど
？」

アモリ「まあ、待て！ 待ってくれ！ ほんの少し相談させてくれ……

キルア「いいけど？」

「ねえ？ 私の番号取つたら頂戴？」

キルア「それじゃー、俺の番号を手に入れたら俺に頂戴な？」

「勿論vvも、う一人の番号どうする？」

キルア「……貰つとけば？」

三兄弟「待て待て待て！ お前たち！ 俺達が負ける仮定で話すな
！ ！」

「アハハハ。勝つ氣でいるんだ？ やり合ひながら今だよ？」

二二二と攻撃態勢に切り替え、アモリ三兄弟に告げる。

ウモリ「くつ・・・うなつたひ・・・行くぞ・・・イモリ・・・

イモリ「分かつたよ・・・行くぜ――――――

「遅すぞ。」

キルア「俺の番号じゃないや。バロンのは?・?

「私のじゃない。キルアのじゃない?・?

番号を見せながらキルアに囁く。

キルア「あ。そうだ。それじゃー、バロンの番号せひこつか。」

言いながらアモリの背後に回る。

アモリ「?・・・何時の間に・・・

「自分でやるからここの?・・・

キルア「殺さないしいいだろ?・?

「そういう問題じゃないのに・・・

三兄弟は何時の間にか倒れていた。

キルア「行こうぜ?・?

「御愁傷さまー。」

いいながら、その場を立ち去る。

キルア「残りの田たひだつする?」

「私は、ヒソカと修行が残つてゐし、ゴンの事も聞きたいからヒソカの所に行くよ。」

キルア「?・・・ヒソカと・・・付き合つてゐるのか?」

「・・・はあ?・・・ありえないし!／＼／＼」

痛いほどに手を振り首を横に振り告げる。

キルア「・・・それじゃー、他に好きな奴、居るの?・まさか、ゴン?」

「・・・違う。ゴンではない。」

キルア「好きな人は居るんだ?」

「居たの。・・・年上の人でね・・・ぶつきら棒で自分の意志を曲げない人物なの?」

キルア「・・・そつか。けど、振り向かせるから?」

「・・・ええ?・・・あの言葉、本氣だったの?・・・

キルア「あれ?嘘だと思った?・・・けど、本氣。俺は、マロンが好きだ。」

「／＼＼＼＼ ん。覚えとく。またね！」

「いつと、キルアから足早に遠ざかる。

（もひー／＼＼＼＼ 年下の子は、あんなにも直球かね？！恥ずかしかったなー／＼＼＼＼）

キルアの言葉を胸に響かせながら歩いていき・・・。

「あのー？ハンゾーさんでしたっけ？」のナンバープレートが必要なんですか？」

ハンゾー「？！・・・何時から気づいていた？」

「三人兄妹の後から。どうする？これ、いる？」

ハンゾー「・・・交換条件か？」

「うーん。別にあげるよ。けど、わたくしの銀髪の餓鬼との会話をか？
いたい。」

ハンゾー「？・・・わたくしの銀髪の餓鬼との会話をか？」

「そう。女言葉だつただろ？！実は、俺、オカマなんだ。」

ハンゾー「？！わたくしだったのか！・・・分かった。内密にしようつ・

「流石は忍者。頼りになるよvvv」

「いやかに笑いプレートを投げ渡す。

ハンゾー「ゾワッ……それじゃーな！」

ハンゾーはバロンを怖がり素早く消えてしまった。

「……以外にバロンの姿、使えるな▽▽」

嬉しそうに森の中を歩いていく……すると。

ヒソカ「マーロン▽▽もひ、プレートは取れたのかい？」

ヒソカと遭遇した▽▽

最後の試験

「・・・もつ・・・ヒソカには驚かない事にしたよ・・・」

目の前に居る奇抜ピエロを呆れながら見つめ呟く。

ヒソカ「・・・キルアに女だつてばれたね？」

「何処から見てて言葉の内容を聞いてたの？・・・まあ、何れかは言つつもりだつたし？」

歩きながら考える。

ヒソカ「・・・告白、あれは本気だよ？」

「うん。分かつてゐつもり。けど、キルアの事が好きだから今は振れない。」

まっすぐに前を見据えながら決断をする。

ヒソカ「・・・前に付き合つてた奴つてどんな奴だい？」

「ヒソカに言つたら殺すから駄目。けど、かつこいい人だよ？見た目よりも中身が。」

嬉しそうに、思い人の事をヒソカへと伝える。

ヒソカ「・・・なんで、別れたんだい？」

「んー？ 何でつて事はないけど、多分、自然消滅。その人、仕事大好き人間だから…」

苦笑しながら小石を蹴る。

ヒソカ「多分、あと少しで試験は終わる。」

「うん。長いようだ短いんだね…」

試験を思いだしながら思い出に浸り告げる。

ヒソカ「…終わつたら帰つてしまつのかい？ それとも、その思い人を探すのかい？」

「アハハハ！ あの人を探す気はないよ。けど、まだ何かありそうだし、展開に任せる。」

ハンター試験を受かつたとしても、私はどうしようかなど考えていなかつた。

ヒソカ「それじゃー、いつでもいいから、天空闘技場に来ると良い。僕はそこに居る。」

「天空闘技場？ 分かつた。会いに行くよ。」

ヒソカの言葉に嬉しそうに答える。

ヒソカ「さあ。戻ろうか。」

「待つて！ イルミにも挨拶したい！ 起きたのかも知りたいし？」

ヒソカ「さうさ、起きていても行つたみたいだけど？」

「えー？？？また、会えるかな？」

ヒソカ「・・・イルミの事が好きなのかい？」

「？？？イルミも友達としてはね？」

はぐりかすように言つと、ヒソカの前から居なくなる。

ヒソカ「・・・うーん、ぞくぞくしちゃうよ。」

ヒソカは居なくなつた人物を思いながら歩みを速めていく。

「ホールvvvさあーもひ、何でも来なさいー。」

テンションを上げながら飛行船へと乗り込む。

すると、田の前には「」の友達のクラピカ君？とレオリオ君？を発見した。

（改めてみると、金髪の子つて綺麗な顔してゐんだ。黒髪の子は、私よりも年下かな？）

ジイツと一人を見つめていると。

レオリオ「げつ・・302番・」

（・・・うん。どうやら、恨まれてゐるみたい。）

少し落ち込み気味でレオリオ君に近づく。

「……一次試験の時はすまなかつた。……ヒソカの氣しか引けなかつたんだ。」

余り良い言い訳が見つからずに頭を下げる。

クラピカ「？・・・ああ。あの時の事なら氣にしてませんよ。」

「え？ だつて、俺見た瞬間に“げつ”って言つたじやん？」

レオリオ「ヒソカと、301番とも仲が良さそうだったからよ・・・・・・殺されるかと・・」

「殺す？！ ないない・俺、人殺し嫌いだもん・」の試験で・・・手にかけたのは一人だけ・」

少し、沈み気味でレオリオたちに説明していく。

レオリオ「なんだ。怖い人じゃないのか。」

クラピカ「そうとなれば年も近そうだ。仲良くしてくれ。」

「おうつ 丶丶丶それじやー、残りの試験、お互に頑張ろうなー！」

言いながらその場を立ち去る。

そして、最後の試験が始まった。最後の試験はトーナメント式の試合。

一度、勝てば合格。そして、この試験では一人が試験に落ちるのだ。

(・・・余り戦いたくないなー。)

戦うのが好きじやない私はうな垂れてしまつ。

ポンポンッ

(?・?・?誰?)

蹲つて居る私の頭を撫でてくれた人が居たのに、見た瞬間、誰も居なかつた。

(・・・氣のせい・・・なのかな?)

自分の髪を撫でながら、立ち上がり氣合を入れなおし、前へと突き進み。

(そうだ。私はこんな所で立ち止まれないんだ!)

前を見据えて、歩き続けると決めたあの頃から、私の運命は決まつていた。

それでも、新たに突き進みたい道にそれようとする私を許してくれますか?

?「・・・。」

そして・・・結果は、キルアの不戦勝と人を殺した事による不合格

となつた。

「・・・どうして?..」

田の前に居るイルミを少し強めに睨みつけながら問いただす。

イルミ「?言つたじやん?俺達の家系は殺人一家だつて?」

「そんな事を聞きたいんじやねー!キルアの意思を無視したのは何故だつて聞いてるんだ!」

私は無我夢中でイルミに怒鳴りつけていた。

イルミ「?俺達の家の事、口に出すならバロンでも殺すよ?」

「・・・構うものか。キルアの闇は俺が救う。そして、キルアを自由にさせよ。」

言つと、その場から、風邪のよつこ、バロンの姿は消えた。

キルアへの愛

私は、あれから、試験会場を飛び出して、ゾルティック家のある、ククルーマウンテンへと来ていた。

(・・・怒っちゃった。・・・嫌だな。ぴりぴりして・・・)

ショックを受けながら門へと向かう。

「・・・でかい。」

田の前にある、ゾルティック家の門へと来ていた。

ゼブロ「へおや。お密さんとは珍しいですな。観光ですか？」

「いいえ。違います。キルアを救いに来ました。」

ゼブロ「?キルア坊ちゃんを?」

「まだ、戻ってないですね?・・・」両親は御在宅なんでしょう
か?」

ゼブロ「?・・・シルバさんもキキョウさんもいらっしゃると聞きましたが?」

「この扉、何か名前があるのですか?入つたら、キルアに会えますか?」

ゼブロ「?...入る?...何を言つてゐるんだい?...お嬢さん!お嬢さん

が開けれる扉じゃない！」

「……何故ですか？」

冷たい瞳でゼブロを見つめ問う。

ゼブロ「……そこの扉は“試しの門”。そこから入れば確かにミケに狙われなくてすむが、常人は入れない；」

「……問題ありません。試されようが、私はキルアに会いに行きます。」

告げると扉に片手を置き、押し上げていく。

ゼブロ「？！何！；扉が……開いた；」（それも、第3の扉……それに、髪の色が……）

ゼブロが見て居るマロンの髪の色は、炎の用に赤くなっている。

「これ以上やると扉が燃えるので止めておきます。それでは、失礼します。」

赤い炎の髪を靡かせたまま庭を駆けていく。

ゼブロ「……まさか……あの子が報告の……マロンさん？…」

ゼブロの咳きなど聞こえずに突き進むマロン。

「バンク。大きな建物を探して。大きくて田立つ建物を…」

バンク『はいでしゅー』

バンクが返事をしながら空高くへと舞つて行く。

（早くしないと、キルアが来る。どんなに命ねつと、助けなきや。私のようになる。）

自分の押さなく、暗い闇を思いだしながら、庭を突き進む。

イフロー『おい。マロン。髪の色、元に戻さないのか？』

（何色だって構わない。兎に角、今は、キルアより先に家に着く事が先！）

バンク『見つけました！大きな家ー！』から300kmは離れてしゅ。』

「・・・ニーハーン。」

ニーハーン『・・・お心をお鎮め下せ。』

「いいから、足への力を貸しなさい。」

自分の中に居る、ニーハーンに向い、怒鳴りつける。

ニーハーン『・・・分かりました。』

次の瞬間、マロンの足の速さは倍になる。

（間に合え。間に合え！・・・私は、キルアの光でありたいんだ

(一)

泣きそうな顔で走り続ける。

そして、多きな……ゾルティック家の家に辿り着いた。

(……間違いなさそうだけど、何でか、普通だ。もつと、邪魔が入ると思つたのに。)

マロンが思うのも無理はなく、邪魔をする人がいなかつた。

(……まるで、私が来た事を知らせたかのようだ。)

そう。ゼブロさんはマロンの事を知つていたため、通したのだつた。

(……この扉も、重たいかなー？)

呑気な事を思いながら、扉に手をかける。と、なぜか、向こうの方から、開いてしまつた。

「さあやんつ！……イルミ……何時、帰つてきたの？……

イルミ、つこわつも。にしても、早いね？

「イルミも早いね。……イルミが私の情報を執事さんにつ。

見ながら問いかける。

イルミ、「うそ。入りなよ。」

「くそー；イルミよりも先に来たかったのに…」

悔しがる所は違う物の、ゾルディック低へと入っていく。

イルミ「親父達、まだ仕事が終わってないからキルアに会つてきたら？」

「？・・・良いの？」

首を傾げながらイルミを見つめる。

イルミ「うん。ミルキには俺が言つとへからう。」

「へー、ルキって？」

イルミ「俺の弟。ここにキルアが居るよ。」

「入りまーす▽▽」

キルアが居る事に機嫌を良くしながら、扉を開ける。

ミルキ「イル兄！・・・・後ろの女、誰？」

ミルキらしき人物がマロンを見つめるも、マロンはキルアの元へと行く。

キルア「？誰？」

「あー。この格好じや分からぬいか？」

いいながら、金髪の髪へと変化していく。

キルア「バロン！；；；え？何で？；」

「クスクスッ 助けに来ないとでも思つた？ 痛い？」

キルアの体を見つめながら問いかける。

キルア「こんなの・・・なんでもない。すげー、嬉しい。」

キルアの言葉には本当に嬉しさが滲み出ていた。

「・・・直ぐに、助けてあげるからね？」

二コリと笑うと身を翻す。

キルア「！待って！マロン！」

え？」

チュツ

キルア「／／／／／　・・・サンキユウ／／／／」

何時の間にか、手枷を外し目の前に居たキルアにキスをされたのは
夢だったかも？

ソル家の家庭訪問？

真っ赤になりながら、キスをしてきたギルアを睨み立つ。

キルア「…で?どうするつもりなんだ?」

ん！？考えたなしvv

キルア「はあつ?!なのになに来たの?!馬鹿?」

「変から馬鹿になつた！……酷いなー……が、いいよ。じゃないと意味がない。」

キルア「だから、行つて何をどう言つの？」「

「成り行きに任せろ?」

キルア「……マロンさんってそんな性格なんですか？」

「ポジティブでいいでしょ？ゴンとはこんな感じvvバロンはもう一人の自分かな？」

キルア「……あー、もう、いいから、俺の事は放つておけ。」

「無理。ゴンの元に戻す。キルアは私の光だから。」

キルア「・・・は？俺が・・・マロンさんの・・・光？」

「うん。・・・私は闇だよ。けど、キルアはまだ救える。私も、救われた人物だから。」

少し、悲しそうな顔でキルアを見つめながら呟く。

ミルキ「おい。もういいか？」

痺れを切らしたミルキが私とキルアに向い言つ。

「・・・一時のお別れだね。けど、必ず、キルアを救うよ。だから、待つてて？」

キルア「恥ずかしいから早く行けよ；；；；；；

「了解vvv・・・待つてね。」

イルミ「ーー待つて。マロン。」

身を翻し、地下拷問室から出て行く。

その場からイルミも離れて、マロンを追いかける。

イルミ「・・・キルアが俺と付き合えば自由になれるよ？」

「そんな事をしても幸せになれないんだよ。キルアも、私も。・・・それにイルミも。」

イルミを見つめる瞳は、何時ものマロンの物へと戻っていた。

イルミ「・・・うん。マロンって馬鹿正直ないい子だよね？」

「納得しないでよ・なんか、近頃、皆から貶まれてるよつ・・・な。

「

マロンは少しづつ小声になると前の方から銀の髪をした人がやってくる。

（・・・キルアに似ている。）

なんとなく、そう思いながら、その人物を見つめる。

イルミ「親父。仕事に一区切りをつけたの？」

シルバ「イルミか。何時、帰ってきたんだ？・・・それに、その人は？」

シルバの瞳がマロンを捕らえていた。

「・・・始めて。マロンといいます。イルミさんとキルア君にはお世話になりました。そのお礼と、キルア君の事についてお話ししたい事がありやつて参りました。」

礼儀正しくもあり、だが、少し、力を込めた瞳でシルバを見つめ言う。

シルバ「・・・ほう。その髪の色。念か?面白いな。」

シルバはマロンの髪に興味を持つたらしく見つめながら呟く。

イルミ「マロンは姿形も帰れるよ。それに、異性にも……ね？」

「……はい。ある程度ならば変化は可能です。」

いいながら、髪の色が水色へと変化する。

シルバ「……特質系か？」

「系統は詳しく調べておりません。けれど、多分、特質系なのでしょ。」

言いながら、髪の色が茶色へと変化する。

シルバ「本当の髪の色は何色なんだ？」

イルミ「立ち話もなんだし、親父の部屋つて空いてるの？」

シルバ「空いてるが、血の匂いがするぞ？」

（うわあー。本当に殺人一家なんだ…）

改めて実感するマロン。

バンク『……何かいるでしょよ？』

カーバンクルが言いながら飛び立つ。

「？！待ちなさい！バンク！…ごめんなさい！」

頭を下げるといつもその場を後にする。

「…マロンが向かっただけ…」

「ちゃんと顔合わせさせてくれ。イル!!」
シルバ「キキョウが居るだろ? それにしても、面白い。後で、

イルミ「うん。勿論だよ。俺もちゃんと紹介したい。」

「バンクー？・・・バンクー。・・・何処に行つた？・」

悪戯っ子のバンクを捜して迷子になつた二十歳のマロンさんvv

(年を言えば年を語りはじめる、寂しくなるなー。)

キキョウ キヤーーー！なんですか？！汚らわしい！「・・・

・・・ああ、どうやら、元凶の元を見つけられそうだ。」

バンクが私の元へとすつ飛んでくる。

「何があつたのかを説明できるよね?バンク・」

一つの部屋を覗くと荒れ放題となつてゐる。

キキョウ「その変な生き物は、貴女のですか？！」

（？・・・この人、悲しい人だ。）「・・・すみませんでした。マダム。この子が失礼をしたのであれば謝ります。いいえ。謝らせて下さい。申し訳ありませんでした。」

キキョウ「？！・・・話しの分かる子は好きよ！・・・それは念なの？」

「はい。私の大切な仲間です。」

頭を下げたままキキョウに事情を説明していく。

和解する闇

キキョウ「まあ・・・イルとキルの・・・マロソセんと眞ったわ
ね？」

「・・・はい。」

キキョウ「・・・貴女からは私と同じ闇を感じるわ。」

「・・・私なんて、闇に住んでたのは少ししかなかったので・・・」

キキョウ「それでも、元は闇の住民。やつ簡単には抜けれないはず
よ？」

「・・・けれど、闇にはもう、染まりたくないのです。キルアにも
・・・染まつもらいたくない・・・」

キキョウ「・・・分かった。キルの事は許すわ。」

「一本当ですか?!」

キキョウ「私と似た人間に出来たのも運命でしょう?けれど、
闇はそう簡単に抜けれないわよ?」

「・・・ええ。私が良く分かっています。光は眩しそぎます。」

暗い顔をしながら呟く。

「・・・けれど、なぜか、闇の住民は光を欲しがる。それは・・・

羨ましいから?」

キキョウ「……」めんねれ。辛い事を思い出させたみたいね。
涙を拭いて?「

言しながら高そうなハンカチを差し出してくれる。

「……私……泣いて……?」

自分の頬を撫で困惑した面持ちで告げる。

キキョウ「……闇を忘れないから光を求めるのだと愚づわ。私も
救われた。」

「……キキョウさんは今が幸せですか?」

キキョウ「勿論よ……だから、貴女にもきっと、光が差し込む
わ。」

「……すみません。泣いてしまって……」

涙を拭き、頭を下げ謝る。

キキョウ「良いのよ。キルアを出す前に、一緒に食事をしてくださ
る? それが私の貴女へのお願ひ!」

「ですが、なにぶん、手持ちの服がなくつて……」のよつた服装では
失礼だと……

キキョウ「貴女に合ひそつた服なら幾つもあるわー! イルミー! イル

「…」

イルミ「…なに? 話は終わったの?」

キキョウ「ええ。イルミ。私は食事の準備をするから、マロンさん
に既合づ服を探して着せてあげて? いいわねー。ちやんとHスゴート
を着るのよー」

言いながらその場を離れるキキョウ。

「元気なお母様だね?」

イルミを見つめたまま、動かないマロン。

「まさか! 相談に乗つてもらひただけ。」「めんね? 時間も手間も取
らせて?」

イルミ「俺は別にいいけど。それよつも、服、どうじよづか?」

「イルミが見立ててくれるの? クスッ キキョウさんみたいなひら
ひらじやなきやつこみー」

想像しながら意見を出す。

イルミ「なつ、移動しよう。この部屋では母さんの趣味の物しかな
い。」

いながら部屋を出て別の部屋へと行く。

「・・・いいお母様だね？」

少しほうとしたよつな顔で、イルミに少くともへ。
少しほうとしたよつな顔で、イルミに少くともへ。

イルミ「あれ？もしかして、馬が合つちやつた？」

驚いた表情で部屋に入りながら私を見やつ。

「意外とね？うわあ・・・凄い服・本当に服が好きなんだね？？」

イルミ「この部屋の中の物は母たちのよつせマシだけビヘ。

「・・・誰の？」

イルミ「俺の婚約者とか、気に入った女性に着せた服だったかな？」

「それじゃー、殆ど着てないんだね？」

呆れたよつて服を見ていく。

イルミ「どう？気に入ったのとがある？」

「うーん・・・いっぽいあつさきて迷つよ・それに・・・私が一緒に食事をして良いの？・

今更ながら不安になり、イルミを見つめて小さく問いかける。

イルミ「随分と氣に入つてたみたいだしね？それに、親父も話した
いつて。」

「それなら、断れないね。」

「ユーローン』これなどはいかがですか?』

「胸が目立つよ。」

「イルミ』え?』

「念能力の一つ・ユーローンが、これがいいって。」

胸を強調した服を見せながら囁つ。

イルミ』・・・。』

「胸に自信ないし、見せたくもない。けど、色は好き。』

シヴァ』私は、主にはこちらが似合つかと思いますが?』

「悪くはないけど、私に合うかな?・エレガントすぎるのも嫌。」

バンク『僕はこれがいいでしゅ ▽▽』

「?・!・バンク!・・・・・ 何を持つてるの!・・・・・

下着のような透けている服を持ち遊ぶバンク。

「意見が合わない。」

中にいる子達に耳を貸し困惑するマロンが告げる。

イルミ「クスッ いつもそんな感じなの？」

念を見つめながら問うイルミ。

「うん。性格の違う子ばかりで困るの…イルミは私にこの中でどれを着て欲しい？／／／／／」

一応、念能力の生き物達が選んだ物を見せながら話しを振る。

イルミ「一番、最初のやつ。」

「胸を強調したりと…！嫌／／／／／ 無理です…」

イルミの意見を聞くも恥ずかしく後ろを向く。

イルミからのプロポーズ

イルミ「胸に自信なって……意外とあるよね？」

何時の間にやら、真後ろにいるイルミに呟かれる。

「？！／＼／＼／＼ そういう問題じゃなく……その……いうこう
服、着た事がなくって……」

イルミ「着てみれば？意外と似合つかもよ？」

「着ても、胸を隠せるようなショールが欲しいの！／＼／＼／＼

なぜか、話しながら、私は壁へと押しやられてしまい、逃げ場がな
くなる。

「……それに……私は着飾らないままが良い。」

納得をさせようと必死に説得する。

イルミ「マロンは、もひとつオシャレをしたほうがいいよ。可愛いん
だし？」

「私なんか、可愛くないよ！／＼／＼／＼ それに、やっぱり、着たく
ない……」

イルミ「無理。着ないなら脱がして着せる。」

「ああ。着せない。着ないという選択肢は消えてるんだ？……」

呆れたように田の前の人物を見やり言ひ。

イルミ「これなんかビリ~」

新たな服を私の事を無視して選んでいくイルミ。

「・・・無視なんですね?寂しいです?」

シユンと頬垂れ、その場での字を書いて落ち込んでしまひマロン;
イルミ「・・・皿ひとくせび、そのまま壁と向き合つてると襲つよ?
?」

「...まさかー...イルミさんがそんな冗談を言つたですか?...」

驚いた表情でイルミを見つめるも。

イルミ「俺が冗談で物事を言つて思つてゐるの?」

「...なつ...なつ...なつ...本氣...なんですか?...」
「...」

体勢を立て直し、イルミを見つめ小さく問い合わせる。

イルミ「うん。妹みたいに思つてたけど、守りたいって思つたら好きになつてた。」

「間接に説明をいただきありがとうございます」

恥ずかしくなり、顔を反らし、イルミの事を真剣に考える。

「…直ぐに答えを出せなんて言わないから? 考えてみて

「……ん。考えとく。」

「イルミーマロノ。これを着なよ。」

「うん。絶対に嫌だ▽▽」

イルミが差し出してきたのは、何故だか、バンクが選んだ下着のような服だった；

そして・・・とうとう、私は、一番、最初に選ばれたドレスを着る事となってしまった。

自分の姿にしみりもみりになり、後ろに居るイタル//を見やつかれて
つぶやく。

「ミル」

「？イルミ？・・・もしかして、かなり似合わなかつた？？」

後ろの人物を振り返り見つめて更には首を傾げて問うマロン。

イルミ「……否。逆。似合いすぎて言葉がなかつた。」

「／＼／＼／ 真顔でそんな恥ずかしい事を言わないでよ／＼／＼／

胸を強調された服に視線を落とし、真っ赤な顔でイルミに言ひ。

イルミ「ああ、お嬢さん？ エスコートをするので、お手をどうぞ。」

イルミしてみれば、イルミは美形の良い所の坊ちゃんにしか見えない。

「あらへ、お嬢婆娘を扱いきれるかしら？」

〔冗談っぽくイルミの手を取り、緊張を紛らわす。〕

イルミ「自信を持つて・・・胸を張つて？」

「これ以上、この胸を強調しつづけ言ひの？・」

イルミに言われたとおり、自分を落ち着かせ、睨みながら言ひ。

イルミ「だつて、素敵なのに隠すのはもつたといないよ。」

「だからー／＼／＼／ そんな恥ずかしい事を真顔で言つた／＼／＼／」

イルミの言葉に反論しながら怒鳴りつける。

イルミ「着いたよ。緊張は解れた？」

「全然。かなり緊張してる。」

イルミ「それじゃー、おまじないしてあげる。」

眞つ赤になり、イルミは私の手を引き、唇に優しくキスしてきた。

「…／＼／＼／＼

真つ赤になり、イルミから離れる。

イルミ「ほら。中に入るよ？」

「…・・・なんで、キスした相手にそこまで普通かな？・・・

イルミ「…・・・普通じゃないよ。好きな子にキスしたのに普通で居られない。」

言いながら手を取るイルミの手は汗を握っていたので少し湿つてた。

「／＼／＼／＼・・・入る？・もづ、大丈夫だから。」

イルミが本気なのを感じながら、部屋へと歩みを進める。

ガチャッ

キキョウ「まあまあ！見違えて…その方が似合つてるわ。」

「いえいえ。私など、その辺の虫けら同然です。キキョウ様の美しさには適いません。」

私はさつさまでの緊張などお構いなしにキキョウに喋る。

シルバ「あ。座りなさい。食事にじよづ。」

「はー。イル//わざ。お願こします。」

イル//「うざ。」の席に座つて。」

イル//セマロンをホスロードし、席くと座りはじめる。

シルバ「先に食事をしよう。」

シルバの声と共に、毒のたっぷり盛られた食事会が始まった。

ゾル家の食事会

ゾル家の食事会がこんなに静かで落ち着かないものとは思わなかつた。

ゼノ「フム。それでは、少しお前さんの話を聞かせてはもうえないか？」

ある程度、食事を終えた皆さんが私を見やり問う。

「はい。勿論、よろしいですよ。」

私は、毒の盛つた食事をドルチェに食べさせ、その場を逃れた；

シルバ「マロン・・・と言つたな？念は誰かに教えてもらつたのか？」

「はい。ヒソカと言う人物。」

シルバ「何個の力を持つて居るんだ？」

「分かりません。10以上だと思われますが・・・」

シルバ「・・・キルアとイルミの事はどう思つてるんだ？」

「？大切な仲間だと思つておつます。・・・今はそれ以上でもそれ以下でもありません。」

目を反らしながら答えていく。

ゼノ「……シルバや。マロンさん、キルアを任せてしまひにや。」

シルバ「だが、親父！」

ゼノ「マロンさん。キルアの事を頼めますか？」

「……私などでお役に立てるのであれば、キルア君の面倒を見ます。」

ゼノ「ウム。彼女もいつまでもゐるにじや。シルバよ。キルアを自由にしたらいだうだ？」

シルバ「……」

ゼノ「世界を見つめるのも一つの修行じや。」

シルバ「……分かつた。だが、俺は諦めない。キルアを最強の殺し屋にする。」

「私も、キルアに素晴らしい、一人の人間となつてもらいたいです。」

シルバを見つめたままに静かに告げる。

キキョウ「話はすんだみたいね？ミルちゃん？キルアを自由にしないな。」

ミルキ「ブッ！……本氣で言つてるの？お母様？」

ミルキは母親を怪訝そうに見つめ小さく問い合わせる。

キキョウ「当たり前でしょ？…マロンさんとキルアを見てもうえ
るのですもの！私はその事が名誉であるから嬉しいのよ！」

「キキョウ様。私めがキキョウ様のお目にかかれた事の方が名誉で
す。キルアの事は、私めにお任せ下さい。」

ミルキ「…一体、この女、何者だ？…そりはそりで、イ
ル兄にもお母様にもお父様にも好かれてるなんて？…」

ミルキは疑わしい瞳でマロンを見つめたまま動かない。

「…あの…ミルキさん？早くキルアを開放してください。」

「…ながら、マロンのバックには大きな念が渦巻く。

ミルキ「なっ？！…なんだ？？」

「言葉よりも先に行動。リバイアサン。ミルキを連れて行ってくれ
る？」

リバイアサン『ああ。分かった。』

「…」、ミルキはその場から姿を消した。

イルミ「…何をしたの？」

「早くして欲しかったから飛ばした。牢屋の中でも良かつたけど、
それじゃー、開けれないからさ？」

転々と話して居ると、ミルキとキルアの姿が急に現れた。

「ミルキ」「？？」「どうなってるんだ？？」

キルア「マロン……だよな？？」

「さつき振り。キルア。……似合わないかな？」

自分の格好を見つめながらキルアに問いかける。

キルア「まさか！／＼／＼／＼見違えた／＼／＼／＼」

キルアは照れくさがりながらマロンを見つめて囁く。

「私、ゴンが来るまではキルアの面倒を見る事になつたから？」

キルア「ゴンたちも……来るのか？」

「？・・・ゴンなら必ずやつて来るよ。だから、それまで一緒に修行でもする？」

キルアに田線を合わせながら聞いかける。

キルア「・・・ん。マロンと一緒に待つ。」

「クスッ そつまつ事なので、お部屋を一つ、お借りしてもよいしいでしょつか？」

キルア「俺の部屋で一緒に寝ればいいの！」

「駄目。キルアってば、私どもこの事を聞くつもりなんでしょう？」

苦笑しながら、キルアを見つめる。

キルア「いいだろ？それに、俺の事も監視した方がいいだろ？」

何かと理由をつけて廻に居みたりするキルア。

シルバ「今日だけは一緒に寝てやつてくれないか？部屋は明日、用意しよう。」

「あー、分かりました。」

キルア「やつたー！マロンー、部屋に行こうぜー。」

「キルア、そんなに引っ張つたら服が破れちゃうよー。」

キルアに引かれながら席を立ち去るマロン。

キキョウ「随分とキルちゃんもマロンさんが気に入ってるのね？」

イルミ「ナビ、マロンは誰にも渡さないけど。」

シルバ「ハハッ。だが、どうやら、誰かにマナーを教わってるようだ。恋人かもしれない。」

自分の息子を面白そうに見つめて問いかける。

イルミ「うーん。・・・けど、今は恋人、居なさそうだし、様子を

見るよ。」

シルバ「・・・それは構わないが、様子を見てるついでにキルアに手を出されるだ？」

イルミ「それは勿論、阻止するよ。」

言いながら、キルアの部屋へと足早に向うイルミ。

シルバ「クックク。困った物だ。」

キキョウ「本当にマロンさん心変わりをすれば楽なのにー。」

そんな話をしてるなど、キルアの部屋に居るマロンは知らずに、突然、扉を開けて入ってきたイルミにもかなり驚いた。

キル

キルアの事件から、結構たち、ゴンたちが来ていた。

「・・・もうそろそろか。」

ゴンたちの様子を思いながら少々くづく。

キルア「・・・どつか、行つちやうのか?マロン。」

「ゴンに会つては行かないからね?私の事は黙つてよっ・・・

ゾル家とすつかり打ち解けたマロンがキルアの部屋でキルアを見つめながら言つ。

キルア「勿論。ゴンにはいわねーよ。けど、何処に行くんだ?」

「全然、決めてない・」

キルア「馬鹿だろ?それ?・・・」

呆れたように私を見て亥くキルア。

そんな会話をしても居ると、マロンの懐から機会音が聞こえてきた。

「・・・携帯が鳴るなんて、ゴン以外に教えてないんだけど、ゴンは携帯もつてないし?・・・」

恐々と鳴らない筈の携帯のディスプレーを見つめるマロン。

キルア「へえ？マロンって携帯、持ってるんだ。誰か？」

「……分からぬ。登録してない人から何故、鳴るか？」

ディスプレーには“ヒソカ”と書いてあるのは見間違いであつて
欲しい。

キルア「……出ないの？」

「うーん……何の用だる？」「

言いながら、携帯に恐る恐る出してみる。

ヒソカ『やあ なかなか、出でくれないから興奮しちゃう所だった
よvvv』

「何で、私の携帯の番号を知ってるの？？」

ヒソカの答えを聞いたいよついで聞きたくない私は恐る恐る聞いてみ
る。

ヒソカ『知りたい？それはね。』

「やつぱりいい……聞きたくない……それで？何の用？ヒソカ？」

ヒソカの言葉を途中で遮り問い合わせてる。

ヒソカ『少しは相手をしてくれてもいいじゃないか？……マロン
は今、暇かい？』

「いいえ。全然。まったくもって暇じゃないよ。」

ヒソカ『それじゃー、天空闘技場に来なよ。』

「私の言葉を無視したよね？；・・・まあ、いいけど・」

ヒソカ『待つてるつもりだけど、場所は分かるかい？』

「分からぬかも；地図、送つてよ？』

ヒソカ『分かつた。それじゃー、迎えにいくね？』

「駄目；そつちに行くから」；「ちまで来ないで；」

ヒソカ『チエ 仕方ないな。分かつたよ。地図を送るからね？ちやんと来てね？』

「行かなかつたら？」

ヒソカ『無理やり襲うvv』

「必ず行かせて戴きますー！」

私はヒソカに怒鳴りながら電話を切つた。

キルア「・・・頑張れよ？；」

「・・・応援されたくないわ；」

出かける準備をしながら言ひ。

キルア「俺とゴンも用があつたら天空闘技場に行くから?」

「助かる・私だけじゃ逃げ出したくなるもん・それじゃー、行くね?
?」

キルアに手を振ると扉を開け歩き外に出る。

イルミ「あれ?マロン、帰るの?」

「あ。イルミ。うふ。長居は無用だからね?イルミは仕事?」

イルミ「まあね。何処まで行くの?」

「天空闘技場まで・・・ヒソカに会いに・・・

頃垂れながらイルミに言ひ。

イルミ「・・・送りうか?」

「本当ですか?嬉しいです。」

「ひとつと微笑み言ひ。

イルミ「・・・飛行船。乗りなよ。」

飛行船に案内されながら言われる。

「イルミさんは、何の仕事で何処に行くんですか?」

イル」「・・・ごめん。言えない。」

「謝らないで下さい、私が聞いた間違いでした、さあ、行きましょ
う。」

飛行船に走りながら貴方に声を書け

「もう、日本へ戻ると転ぶか？」

「妹扱いは止めて下さい。」

飛行船に乗り込みながら文句を言つ。

イルミ「妹？ そんな風に思つてない。俺は、マロンの事、好きだよ。」

真っ赤になりながら貴方に言い。

「いつおしゃべり、本気だよ?」

真顔で続けるイルミさん。

耳を塞ぎイルニに叫び言ひ。

イル」「チハ。まあ、覚えておいて?」

「今すぐ忘れない気持ちですよ…」

イルミの言葉に返事を返して居る間に飛行船は飛び始めた。

暫く、空を飛んでいると天空闘技場らしき建物が見え始める。

「あそこって、やうにえばどんな所なんですか？」

イルミ「知らないで来たの？まあ、名前のとおり戦う場所だよ。ヒソカはきっと頂上に居るだろ？からまあ、頑張りなよ？」

「…なんだか、私、とんでもない事に巻きこまれてない？…」

苦笑しながらイルミに囁つも、何時の間にか飛行船から降ろされ、飛び去っていた。

ヒソカと試合

天空闘技場にて、登録をしたら、やはり戦う事になった。

ゾルティック家によつて、少しは鍛えられたので、戦うのには、不便をしなかつた。

そして、何時の間にやら、200階に到達した。

そしたら、やはり、ヒソカが待つていた。

ヒソカ「久しぶりだねvvマロンvv」

「久しぶり・私、戦うなんて聞いてなかつたんだけど…」

ヒソカ「まあまあ、ここまで来れたなら良いじゃねーか。」

「それで、用事つて何?人の携帯に勝手に登録する位なんだから、タダ事じやないんでしょう?」

ヒソカ「いいや?会いたかつただけだよ?」

「・・・そんな理由で人の携帯に・・・」

ヒソカの性格は、分かり始めていたが、脱力したマロンだった。

ヒソカ「たまには、いつかう所も良いんじゃないかい?それに、ちよつとした小遣い稼ぎになるよ?」

「・・・実際の心は?」

ヒソカ「ゴンとキルアが来るつて賭けてるんだ。」

「?...ゴンとキルアがここに?...何で?...」

ヒソカ「勘^{△△}」

「・・・ゴンとキルア・・・ゴンとキルア・・・うん。確かに、来るかも?」

ヒソカ「マロン。・・・今は、バロンか。僕と戦わない?」

「絶対に嫌。」

そんな会話をしながら、マロンは、『えられた部屋に行こうとするのだが・・・。』

「・・・なんで、着いて来るんだ?・」

ヒソカ「対戦をオーケーしてくれるまで^{△△}」

「・・・良いよ。バロン=ユーローンの姿じゃないな。」

ヒソカ「?何で?」

「バロンの姿のまま、天空闘技場で戦つて、もし、ゴンが来たら怪しまれるつて!・」

ヒソカ「・・・ゴンは、そこまで頭が回らないんじゃない?」

「あの子は、変な勘が鋭いのよ・バロンの・・・ましてや、試験を受けた姿のままだと、可笑しいって勘織るに決まってる・」

ヒソカ「分かったよ。何で、向つて来るんだい?」

「ヒソカが好きやつな奴。」

「こやかに伝えると、ヒソカから、殺氣とは違うオーラを感じた。

「?・・私の試合日時は、ヒソカが決めて良いから?・・・」

慌てて逃げるよひに部屋の中に入ると鍵をかける。

(・・・興奮・・・してた?・・・)

鈍いマロンでも分かるほど、ヒソカは、マロンとの試合を楽しみにしているようだ;

しばらくして、マロンとヒソカの試合が開始された。

「・・・何も、今日じゃなくつたつて良いんじゃない?・・・」

ヒソカ「マロンは、逃げかねないからね。」

審判「?・あのー?バロン選手・・・ですよね?」

「?・やうですよ。」

審判「?・下の報告の姿と違つやつたな・・・。」

マロンの姿は、髪の毛が短く、三つ編みで結つてあるように纏めてあり、姿は、青を中心とした服に男。

髪の色は、銀に少し青を混ぜた感じで、身長は、166cmに伸びていた。

「気にしないで下さい。これも俺なんですよ。」

「一二一二」と、審判に早く始めるように促すバロン。

審判「…それでは、試合開始！」

審判のその声を聞くと、ステージ上に、ヒソカとバロンの姿が消えた。

審判「?…どうなってるんだ?…まったく見えません…」

二人とも、凄い速さで、攻防を繰り広げているので、審判は、ポイントも付けられずに居る。

数分後、砂煙の中、二人は立っていた。

「はあっ…はあっ…」

ヒソカ「つ…」

二人とも、少しだけ掠り傷を負つて居るも、内面的に、限界が近づいているのは見て取れる。

「・・・そろそろ、終わりにする?」

ヒソカ「・・・そうだねー。」

言ひつと二人は、組み手を始めた。

審判「おつと? !組み手を取つた! どちらかが引けば、終わりな感じです!」

微妙な、審判の中、二人は、組み手を取つたまま。

ヒソカ「バロン。 „ „。」

「・・・はあつ? !」

ヒソカが、何かを呟いて、バロンは驚き、隙が出来た。

その瞬間、ヒソカに吹き飛ばされた。

審判「えつと・・・KO! ヒソカ選手の勝ち!」

観衆からは、拍手が巻き起つた。

ヒソカとの試合の後、マロンは、気絶をしてしまって、女に戻り、ヒソカに抱き上げられ、ベッドに連れて行かれた。

「…………んつ…………は？」

ゆうぐうと田を覚まし、辺りを見回そうとするも、何かに視界を阻まれて見えない。

「…………何…………これ？」

ペタペタと、壁のような……だが、動いてる物に少し手を這わす。

ヒソカ「クツクツクvvv隨分、積極的だねvv」

マロンの頭上から、あの、奇術師ヒソカの声が聞こえてきた。

「…………ええ？！何で、私、ヒソカの腕に抱かれて寝てるの？！」

焦つて、その腕の中から逃れようと身を捩る。

ヒソカ「動かない方が良いよ？怪我をしてるんだから。」「

「…………そういえば、私と、ヒソカ……戦つたんだつた……つて納得してたまるもんですか！」

ヒソカの胸の中で、再び身動きを始めるマロン。

ヒソカ「クッククククvv逃がさなこよ。これでも手加減したけど、
氣絶するとは思ってなかつたからで?心配・・・したんだよ?」

ヒソカは、マロンを抱きとめると聞こえるよつに呟く。

「・・・って、ヒソカが氣絶させたんだから、責任を取るのは、当
たり前だよね。」

納得いかない顔で、ヒソカの腕の中に納まり続けるマロン。

ヒソカ「それにしても、強くなつたね。マロン。驚いた。」

「ヒソカになんて言われても嬉しくない。だから、ヒソカ。腰に回
した手を離して。」

睨み付けながら、ヒソカに言い放つマロン。

ヒソカ「うーんvvもう少しだけ。」

「いや…なんで?」

再び、体を捩ると、姿を水色のものとなつた。

シヴァ「主の言い方が温いのです。離れなさい。汚らわしい!」

シヴァがそこまで言つと、水の波動のよつなものがヒソカにぶつか
つた。

ヒソカ「?・・・・びしょ濡れ。」

シヴァ「貴方がしつこのがイケナイのですよ?」

ヒソカ「君は・・・?」

シヴァ「シヴァです。水を呑つておつます。そして、主の身を守つております。」

軽くお辞儀をしながら、シヴァは、警戒の糸を解かない。

ヒソカ「・・・マロンは?」

シヴァ「起きてますよ?意識も同じなので、繋がつてます。主が嫌だと言つのであれば、我が身に変えて、守るだけです。」

ヒソカ「けれど、その体はマロンのんだよ?」

シヴァ「やつですね。主の体を傷つけなにすべは身につけておつますので。」

ヒソカ「・・・ふうつ。分かったよ。マロンは、主を出でない。」

シヴァ「・・・」の部屋から、出て行きます。しかし、ヒソカ殿の部屋ですかね?」

ヒソカ「やじまで、警戒しなくて良いじゃないか?」

シヴァ「主は、貴方を信用していますが、私は、しておつませんので。失礼します。」

そこまで言つと、シヴァは、ヒソカに背を向けて、部屋から出て行

つた。

ヒソカ「かつこいいなー▽▽」

「じめんね・シヴァ・」

シヴァ『良』ですよ。ヒソカさんが悪いんですから。』

「本当にじめんね・」

そう、話してると、エレベーターが誰かを乗せてやってきた。

?「・・・・。」

（ふわー。可愛い人人。）

?「ねえ。あんた。」

「?・・・私の事ですか?」

周りを、一回、見渡し、可愛い女人を見やり問いかける。

マチ「ああ。あんた、この辺で、ヒソカって言う人物知らない?」

女人人は、マロンを見つめたまま問いかける。

（ゾクッ！この人・・・念能力者だ！）「ヒソカ？知つてますよ。この階では最強だつて言われてますからね・彼に何が御用で？」

丁寧に、ヒソカの事は、他人ですよーと思いながら問いかける。

マチ「案内してくれない？あいつの部屋に。」

（いやいや…無理でしょ…）「ヒソカは、もつそろそろ試合ですの
で、そちらに行けば会えますよ。入場券は、まだ売り切れてないと
思つので、行ってみたらどうですか？」

丁寧に敬語のまま、警戒を解かずに告げるマロン。

マチ「そうかい。色々とありがとうございます。」

そういう立ち去る女人の人。

イフリート『おー。マロン。お前、肩に何かついてるぞ？』

（あの女人だ…エレベーターに乗つてから焼いて…）

イフリート『了解。』

そう会話をしながら、エレベーターに乗り、マチがマロンに付けた
念糸を燃やした。

（一体、何者だろう？那人…。）

マチ（あの女。私の念糸を切つた。只者じゃないね。）

そんな一人の心情がありながら、マロンはある事を思い出した。

『お前がこの試験で

（「うーん…トセさん連絡してない…怒ってるだろ？」「…」）

試験が終わったら、連絡することになったのに、連絡をしないで寄り道二昧。

あの//トセさんが、怒らないわけがない。

「連絡入れて、へじり鳴り帰るかなー。」

「トセさんの寂しがつてる顔を想像しながら、マロソン電話をじこぐ。

そして、電話を見つかると即座に//トセさんに連絡を入れてみた。

『//トセさん様ですか？』

「//トセさん、まだよ。」

「//トセさん…マロソン…あんた、今まで何処に居て、何をじつたのよ！死んだかと思つたじゃない…。』

電話を掛けたみると、案の定、//トセの怒鳴り声が響き渡った。

「う…めんなれ…試験終わって、ばたばたしてたから…」

『トセさんも困るの…。』

「『モン』は居なごの……『モン』とまー緒に行動しないから……

『ア』あんた……本当に『モン』離れする氣なの?』

「うふ!それは、良いんだけど、私、明後日、帰るかい。」

『ア』……はあつ? ……何よ? 突然? ……

「ホームシック?」

『ア』何で、疑問系? ……何時頃、帰つてくの?』

「たぶん、遅くなるから、待つくなくて良いよ?」

『ア』待たないわよ! ……何が食べたいの?』

『ア』やんの『アースパゲッティ』がいいな。』

駄洒落じやありません……の一人は、いつものよつな会話なので
す;

『ア』また、めんどくさこものを……氣を付けて帰つてきなさいよ?』

「はーい。明後日ね。』『やん。』

そう告げ、電話を切る。

(『ア』やんの土産買つて、帰ろつ。何が良いかなー。)

フカフカと買い物に出歩くマロン。

(あの店、可愛いー。)

そう言って、覗いた店は、オルゴール店だった。

(オルゴールか。・・・?あれ?念を纏つてるオルゴールがある。)

オルゴールを眺めると、一つのオルゴールから念を感じ取れた。

店主「いらっしゃい。そのオルゴールは、競売物なんだ。」

「競売?」

店主「ああ。値札に値段を書いて貰うものだ。今日の夜まで受付だから、今のうちにそれ以上の値段を書けば、貴方の物ですが・・・。」

「?ですが?」

店主「そのオルゴール、音が鳴らないんですよ・なんでかは分からないんですが・・・」

「そうですか・・・。」(念能力者の念かな?バンク。)

バンク『はいでしゅ?』

(直せる?・)

バンク『任せるでしゅ!』

バンクは、楽しそうにオルゴールを触る。

暫くすると、オルゴールからは、綺麗な音が流れ出た。

店主「？！音が！……なんと、綺麗な音なんだ。」

「この紙に値段を書けば良いんですね？」

店主「あ……ああ……」

「では、夜、取りに来ますので、取つといてくださいね。」

マロンはそこまで言つと、身を翻し、天空闘技場に戻つた。

すると、そこには、居るはずのない人物が居た。

（？！ゴン？！キルア？！何で、こんな所に？！？）

マロンは、只今、二人に気付かれないように部屋に隠れたままです。

（まさか……ヒソカは、一人が来る事を知つて私をここに？？）

モンモンと考えながらも、出て行けない姉心で更に落ち込む。

（……どちらにしろ、今日中にここを出るから、会わないで済むかもだけど……もしかして、あの一人、念を覚えたのかな？）

気配を探りながら、一人の事を遠くから見守る。

（私は……あの一人の側に居られない。）

暗くなるのを部屋の中で待つたまま、オルゴール店に坐って来たマロン。

店主「いらっしゃい。オルゴール。あなたの買値で良いよ。」

「ありがとうございます。それでは戴いて行きますね。」

オルゴールを包み、飛行船に乗り、マロンはへじら島へと帰つていった。

「コンが天空闘技場で、ヒンカと戦つての馬ロンは、へじが島に降り立つた。

「懐かしの我島……」

マロンの島ではないものの、マロンは機嫌良く帰つてきた。

「へへへ。// トセ、怒つてゐかなー？」

懐かしの島と、懐かしの人たちに会ふ喜びがマロンを襲つ。

（「こんな事……あの頃には考へられなかつたの……。）

自分の過去を少しだけ想つて出し、暗い顔をしながら歩き続ける。

（あの過去を思つて吹き出しあつて変わらない。変わらないといけないのは、今の自分だ。）

自分の過去を吹つ切りながら、// トセの面の馬へとゆつて來た。

「只今一。」

「マーローンー。」

「あ。// トセ。只今。」

「只今じゃなによー。試験はビリだつたの?ー! 僕はしていない

のへー。」

「//アホさ…そんなに遙ひすと興合が…・・・・・」

「//アホんに肩を捕まれて揺わざりれながひ哉さる。」

「//アホ・//ースパゲッティ、作つてあるから、先にシャワ
ーを浴びて一息入れなさい。」

「ふあーーー・」

「//アホーさん。お土産、持つて來たよ。」

寝間着に着替えて髪を拭きながら、紙袋を持ち出す。

「//お土産//座じい物じやないわよね。」

「座じこものは買わなこよ・・オルゴール。凄く可憐こよ。」

「//アホ。それじゃ、貰つてあげるわ。」

（素直じゃないなー・・）

そんな、一時が流れていると、いきなり家の扉が開いた音が家中に
響き渡った。

「アホ、「ただいまー。//アホさー。マロノン。」

「ゴン?...」「——...」

突然、愛しの義弟、ゴンが戻ってきてマロンが喜び、抱きつくる。

「ゴン、「ちゅう...マロン...倒れる...」

勢い良く飛び付くと、ゴンはふり付きながらもマロンを支える。

「何時、戻ってきたの?なんで、連絡くれなかつたの?お姉ちゃん、寂しかつた!」

ゴン、「落ち着いてよ!...マロン...紹介したい人物がいるんだ!」

「?...彼女?...」

マロンは、ゴンの言葉に、ゴンから離れ告げる。

「ゴン、「違つから...入つてきて...キルア...」

キルア、「どうも。始めてまして。」

キルアは、表情を変えず、マロンに挨拶を交わす。

「...あら。可愛い男の子。え?...」「...」

「...」

訳の分からぬ兄弟喧嘩を繰り広げるマロンとゴン。

クジラ島ににぎやかな時が戻つて來たのでした。

「つていうか、ゴン。臭いよ。お風呂に入つて来なさい。」

「ゴン」「ええ？…でも、今から…」

「でもじゃない…中に入つたって、ミアさんと同じ事、言われると思つむ？…」

「ゴン」「うう…けど…」

「はい！10！9！8！」

怒った顔でカウントダウンを始め。

「ゴン」「行こう！…キルア…」

「キルア」「え？お…・・・おこ？…」

キルアは戸惑いながら、ゴンにお風呂場に連れて行かれた。

お風呂の中のゴンヒキルアはとこうと…。

「ゴン」「マロンは、ミアさんの次に怖いんだ…それに、容赦ない…」

苦笑しながら頭を洗うゴンが告げる。

「キルア」「へえ。面白い人なんだな。マロンって。」

「ゴン」「え？」

キルア「?なんだよ?」

「ゴン、・・・なんでもない。」

髪の毛を洗う手を再開し、風呂から上がる一人。

「ゴンー本当に帰ってきてたのねーマロンから聞いたけど、驚いたわ!」

「それって、私の言った事、信じてなかつたって事?...」

「アランの葉にマロンは反論してみる。

「だつて、マロン、ゴンの幻覚を見る事が何回か合つたじゃない。」

「何歳の時の話をしてくるの?...」

そんな明るい会話をしながら、ゴンとキルアに食事を出した。

二人は、凄い勢いで、飯を食べ進め、美味しいこと言ひ合つていた。
幸せとはこういったのだと、実感するアランとマロンで
あつた。

キルアは上手に具合でマロンを知らない振りし続け話を進める。

G・Hへの道のり

「ゴンとキルアは、食事を取り終え、森の様子を見に行くといつ話を聞いた。」

「私も一緒に行きたい！」

「ゴンとキルアの言葉に久しく行つていかない事を思い出したマロンは提案する。」

「ゴン、「もうひん、良いけど、すぐに帰つてくるつもりだよ？」

「嘘だー。『ゴンはそつぱつて、1時間とか、2時間は帰つて来ないよー？』

「ゴン、「うう・・・そんな事、なによ。わあ、行こうー。」

目線を反らし、先を歩きだすゴン。

「クスクス　自覚ないんだ。キルアは、どんな家に住んでるの？」

知らない振りを続け、キルアに問いかけてみるマロン。

キルア「殺人一家？」

「疑問形？！家庭事情、いろいろ？..」めんよー。話したくなかった？」

キルア「別に。ゴンにも似たような反応されたし？」

「さうすが、姉弟VV」

キルア「けど、なんで、マロンは森に行きたかったわけ?ずっと、あの家に居たならいつだって行けただろ?」

・・・キルアの嫌がらせなのか、解つてて理由を聞き出そうとする。

「・・・私は、ミトさんを置いて、何時間も家を出たりはしないよ。大抵、一緒に出歩くか、家の前だもん。」

何とか、言葉を繋ぎ話を続けるマロン。

「ゴン」「一人ともー。早く行」「うよーー!」

元気にも知らずに先を歩く、義弟が羨ましい。

「うん!・・・ねえ。キルア。意地悪になつてきてない?」

「ゴン」に返事をし、キルアに問い合わせる声を落として問い合わせてみる。

キルア「俺は、意地悪だけど?」

にやりと勝ち誇った顔をして、「ゴンの元へと走っていくキルア。

「・・・なんか、年下に弄ばれてる感が・」

まあ、それは、さうおき、森へやつてきた三人は、驚きの光景を目の当たりにした。

なんと、人間には、絶対に懷かないとされていた、動物たちが、ゴン達の帰省を知ったのか、川魚を置いて行っていたのだ。

「……お帰りだつて。」

「ゴン」「……うん。」

キルア「それにしても凄い量だな。俺たちがここに来る事、解つたみたいだ。」

小腹も空いてた事で、その場で魚を相手食べた3人。

「……といひで、試験はどうだつたの？」

一応、知らないという事になつてるので、聞いてみるが後悔する事となるマロン；

「ゴン」「あー、そう言えば、マロンに似た男の人、見つけたよー。」

「……>・・・>え。どんな人？」

平静を装いつつ、ゴンの話を聞いつとする。

「ゴン」「? 一言で言つとまんま?」

「そんなわけないじゃん……私は、ずっと、//アヒトと一緒に居たよ?…」

驚きながら、ゴンに首を振り告げる。

「ゴン」姿形は、似てないんだけど、なんか……行動パターン的な？

「……へえ； けど、この島から、一步も出てない私には関係ないか。」

そう、切り返し無理やり話しを終わらせるマロン。

少し、その場で話を続け、そしてから、家に帰った3人。

そこにはトマさんが待っていた。

「マロントマ。少し外してくれる？」

「……うふ。どうせ、もう寝ようとしてたしーお休み。ゴン。キルア。」

マロンは明るく振る舞い自分の部屋に向かう。

「……ジンさん。きっと、ゴンは、貴方を追つて、居なくなる。・・・だから、私も。」

空を見つめ、この場には居ないジンに小さく呟き、ベッドに沈むマロン。

ゴンとキルアが、ジンの情報を手に入れた事も知らず。

次の日、ゴンとキルアは、何かを決心したような顔をしていた。

「……ゴン。キルア。行くんだね？ジンさんの元に。」

「ゴンとキルアを見つめ、小さく、不安そうに問いかける。

「ゴン」「うんー決めたから。ジンにあつて、一発、殴つてやるんだ!」

「クスッ ジンは、そう簡単には、捕まらないよ。空氣みたいな人だから。ね?」

「やつね。行くにしろ、お金とかは大丈夫なの?」

一人の心配性な女が引き留めようとしているが、ゴンの意思が曲がらない事は知っていた。

だから、誰も、ゴンを止める事は出来ない事も、解っていた。

未来がどうあれ、ゴンは、ジンを追つて、歩みを進めるのである。

「ソノとキルアが旅立つたその日、マロンは、ミトセに切り出した。

「……ミトさん。私も、また、クジラ島を出ないといけないの。

「……今度は、帰つてくるの？」

なんとなく、ミトさんの中に、マロンが帰つて来ない事を確信して、いたようだつた。

「……じめんね。分からない。けど、ミトさんのミートスペゲッティ、食べた後に帰つて来ひやうかも。」

困つたよつこ、田の前の人物に告げる。

「馬鹿ね！そんな事、言ひたくないで、じいに居なせよー。」

「……それだけは出来ない。私は、じいを最初から出るつもりで居たから。」

「……分かったわ。けど、落ち着いたら電話を頂戴？」

「うん。それじゃ、行つてきます。今まで、ありがとうございました。」

「……早く行きなさいよー。」

ミトさんの声が震えてるのに気がついたが、マロンは家を後に旅立

つた。

その場で、泣き崩れたミートさんを受け止める人物は、そこには存在しなかつた。

（まずは、仕事を探すか。お金はあるけど、住む場所とかも決めないと。後、私が何者なのかも知りたい。）

そう考えながら、大きな街へ向かう事となつたマロン。

（ヨークシンシティか。ここを拠点にして動くか。）

そう思い、パソコンと携帯を買い、マンションも借りたマロン。

（ハンターライセンスを使って仕事を探せば早いけど、危険が隣り合わせ。だけど、その危険の中に私の秘密も少なからず入つてはずだ。）

借りたマンションの中で、ヨークシンシティ内の仕事情報を見つめるマロン。

（ノストラーデファミリーの護衛？・・・これ、まだ、参加者募集中だ。）

なんとなく、気になつた募集記事欄。

（ハンター優遇。ライセンスの階級、有無なし。お金は、高所次第で幾らでも。）

条件を見つめ、集合場所や参加者などの情報も探る。

(クラピカ？クラピカって、ゴンの友達のあの子へどうして、そんな子が、この仕事に？)

なんとなく、引っ掛かっている仕事の参加者名簿には、クラピカといつ名前が刻まれていた。

(・・・これに、私も参加しよう。)

そう思い、名前をシヴァで打ち込み、参加希望と到着日時などを記載してメールした。

すぐにメールは返信されて、マロンは行動を移した。

メールの内容を見なくつても分かったからだ。

直ぐに来て仕事に参加して欲しいと、決まった言葉が用意されてるに違いない。

(何か隠されてる。ノストラーデファミリーだよ。)

髪の色を水色にしながら、目的の場所へ向かいつつ思ひマロン。

(それにしても、どうしてクラピカ君が、この仕事に参加してゐるのかが、不思議。)

シヴァ『主・お心をお沈め下さい・』

シヴァがマロンの頭の中で、静かにマロンを宥めようとする。

そう言えれば、近頃、出てなかつたなあと思つも、念を覚えた「ン」とキルアにシヴァ達を出すのは、危険だと判断したからだが；

（私は、至つて、冷静だよ？だけど、なんだか、危ない事に足を突つ込んでる気がするんだもん…）

シヴァ『それは、主も同じでしょ？』

（私は、良いの。慣れてるから。）

シヴァ『やつやつて投げやりにならないで下せ…まだ、他の道はあるはずです…』

（投げやりにもなつてない。シヴァ。歩かないと。何も変わらないんだよ？）

シヴァ『…私たちも、主に従つのみですが、傷ついた時は支えられます。』

（あつがとう。シヴァ。側に留てくれて。…着いたよ。）

大きな家を見つめ、ノストラード家に到着したマロン。

インターフォンを押して、中に通されたシヴァ。

仲を見回すと、厳つい男や女、そして、クラピカがそこに居た。

「始めてまして良いかしら？短い間でしょうが、仲良くして頂戴。」

上から田線で、田の前に居る人たちに叫びるマロン。

ダルツォルネ「なんだと！女！生意氣だぞ！お前みたいなひ弱そ
な奴に何ができるって言つんだ？！」

「。。。。」

ヒュッ！

ダルツォルネ「かはつ？！」

ダルツォルネの言葉を聞き、マロンは、一瞬で姿を消し、彼の首を
捉えていた。

「あまり、調子に乗らない事ね。ここに居る人たちは、人並み外れ
ていると思ってる。勿論、私もね？分かつたら、その臭い息、なん
とかしな。」

警告なのか、注意なのか分からぬことを告げ、ダルツォルネを開
放するマロン。

こうして、ノストラードファミリーの仕事は険悪の中、始まった。

ネオン・ノストラード

あれから、ライト＝ノストラードと仕事を話した。

そして、思ったのが、このノストラード・マークが立っているのは、ネオン＝ノストラードとこの娘さんが鍵らしい。

そこで、マロンはネオン＝ノストラードに接触を試みる事にした。

「ライト」「つひの娘と行動を共にするへ..」

「いえ。行動は一緒に取りません。ですが、監視を強めます。」

「ライト」「監視役は既に置いてある。」

「それでも、このノストラード・マークが立っているのは、ネオンさんが活動しているからですね？彼女を見張る方が良いですよ。」

「ライト」・・・何か・君がそう言つたら、ネオンを見張ってくれ。」

「愚まつました。」

「ひつひ、マロン」と、シヴァは、只今、ネオンちゃんを見張つてゐるのですが。

「あの子、変装して逃げる気じや？？」

店内に入ったネオンちゃんを追つと、なんと、髪と服を買つてゐる

だつた。

「「」いや、逃げるな・私も、変装するか。」

言つと、髪の毛が、真つ黒のロングになり、身長一六〇三三〇の男になつた。

「あんまり、この姿になつたくないけど仕方がない。」

店内から居なくなつたネオンを追つて、同じく店内を出るマロン。だが、周りは、マロンを見つめる女の熱い視線が送られていた。

そう。マロンが変装した姿は、傍から見れば芸能人やモデルのよにかつていいのであつた。

(早く行け・・・)

変装してネオンちゃんを追い、なるべく目立たないように歩いてますマロン。

しばらくすると、ネオンちゃんは止まつた。

「ねえ。彼女。どこに行こうとしてるの?」

ネオン「キャッ・・・・・・びっくりしたー・えっと、貴方は?」

「ああ。ごめんね・急に声をかけたりして・俺の名前は、リヴァイア。君みたいな可愛い子を誘おうと思つてここで待つてたんだ。」

ネオン「誘つ？誘つて何に？あ！私は、ネオン＝ノストラード！パパの会社の人じゃないよね？」

（思いいつきりパパの会社の人だよ…）「ノストラード社は知つてゐけど、俺は関係ないよ。誘つて言つたら、ティナー や楽しいイベントだろ？」

ニツコリと、ネオンに微笑み告げる。

ネオン「貴方、本当にかつこいいわね！ねえ？オーケーションには入るの？リヴィア イアさんは？」

「ああ。ヨークシンシティで行われる大きなオーケーションの事だね？残念ながら、僕はあれには参加しないんだ。」

ネオン「えー・残念・」

しばらくネオンちゃんと話をしていたが、その時、男の人気が近づいてきた。

クロロ「やあ。君たち、お似合いのカップルだね？」

童顔な顔立ちで、真っ黒な服装の男の人。

（・・・この人、なんだか、嫌な感じ。）

ネオン「嫌だあ！カップルじゃありませんよー今さつき知りあつたリヴィア イアさんです！」

「どうも。こんちわ。貴方は？」

クロロ「立つて話すのもなんだし、車に乗らない？」

後ろの方に止まってる車を指しながら、田の前の男は囁つた。

（それって、逃げ場は作らないって言つてる気がする。）

ネオン「ええ？ どうしようかなー？」 ヴァイアちゃんはビックリするの？

「僕は、用事があるから帰るよ。ネオンちゃんと話せてよかった。」

二ツコリとネオンちゃんに微笑み告げ、男とネオンちゃんに別れを告げた。

「バング」・・・『主人さま。』

「うん。行くよ。』

そつと、マロンの姿は少年と化し、その場から姿を消した。

クロロ「君は、パパの仕事を手伝つてるんだろ？』

ネオン「うーん。手伝つてるつて言つても、パパの運命とかそういうの占つてるだけだよ？」

（・・・ネオンちゃん、何も警戒しないで男の人に仕事内容、話してる・危険だな・）

マロンは、少年の姿となり、男とネオンの乗つた車の上に乗つていた。

だが、ばれない理由がある。それは、少年の姿が見えていないからだった。

（それにしても、この男、何者だ？）

車の中の会話を聞き逃さないよう集中しながら想つ事。

クロロ「占って、俺の事も占つてくれるので、どんな事を占うの？」
ネオン「一ヶ月の占い」と自分で言葉を書く。それが、
運命。

クロロ「私の占いは変える事は可能？」

ネオン「可能だよ？だけど、難しいかな？」

ソヘン、男はネオンちゃんから詳しへ占いについて聞いていた。

オークション

クロロ「俺の名前はクロロ＝ルシルフル。29歳。俺で占つてみてよ。」

（…Jの人、ネオンちゃんの念が目的だ。）

突然の、男の言葉に耳を疑いながらも中を観察し続けるマロン。

ネオン「良いですよー。」

（…だから、少し警戒してください…）

ネオンちゃんの言葉に苦笑しながら、静かになつた車内に困惑つ。

（…ネオンちゃんが念で占つ始めたな…・…・…・…これ…・…念
？）

いきなり、車内に立ち込めた空氣に外に居たマロンでも驚いた。

（やばいな…どんな人物か知りたくつて追つて来ただけなのに…）

後悔、後に立たずとは良く言つたものである。

しばらくすると、ネオンを乗せた車は止まつた。

ネオン「今日は、ありがとうございました。」

クロロ「…Jの人。Jめんね？連れ回して？」

ネオン「いいえ！それでは、ありがとうございました！」

ネオンちゃんは、クロロと名乗った男と別れた。

クロロ「・・・ところで、お前は、そんな所で何をしてるんだ？」

（？！気付いていた？！そんなわけない！；バンクのこの姿は、念能力者だろうが見つけられない。）

シャル「流石、団長だね。俺が隠れてるの気付くなんて。」

向こうの茂みの方から、男の人が現れた。

（どうやら、クロロと呼ばれた男の仲間らしい。）

クロロ「仕事は終わった。次の仕事に移る。その前に、シャル達の占いをする。」

（あの男の人は、シャルつていう名前。覚えておかないと…）

何個もの念を使っていたせいか、マロンの体力は限界だった。

この所為で、マロンは大変な事に巻き込まれる事は、この時はまだ、解っていなかった。

競売場

車の中での出来事を知りながら、マロン派幻影旅団達を逃がした。

そして、マロンは、シヴァへと姿を変化させながら、電話を始めた。

「もしもし? カムーセ? あなたの状況はどう?」

「順調そう?」

ヴェーゼ『今の所。』

ヴエーゼ『？！何！あいつら！』

「へ? どうしたの? ヴィーザ? ヴィーザ? ヴィーザ! 」

電話口の向こう側が騒がしくなった事に、マロン事、シヴァは、胸騒ぎを覚えた瞬間。

- 7 -

「？」

電話口に向こうから、激しい銃声の音が響いたと同時に、シヴァは動き出していた。

(皆： 生きていて！・)

願うも、競売上に着いた瞬間、その願いは打ち砕かれた。

周りを見渡す限り、生きてる人物や動いて何かをしている人物は見当たらなかつた。

「ヴェーゼ！スクワラ！シャツチモーノ＝トチーノ！イワレンゴフ！」

競売担当者たちの名前を上げるも、返答もない。

「・・・。」

円を張り、念能力者を探すと、円にかかつたのが屋上。

それを感じ取つたシヴァは、屋上に向かつた。

シズク「簡単に仕事、片付いて良かつたね。」

フランクリン「簡単すぎて、肩慣らしにもならなかつたな。」

ノブナガ「まったくだぜ。もっと、強い奴は居ないのかよ？なあ？
ウボオー。」

ウボオー「本当だな。」

気球に乗り込む幻影旅団達は、気を抜いていた。

バンッ！

• • • o

ノブナガ「なつ！；まだ、生き残りが居たぞ！」

フリイタン、そんなはずはないね。念で、確認済みね。

シスケーとにかく今は氣球を上げないとアランケリン。」

フランクリン「ああ！俺の両手は機関銃だ！」

卷之三

- 10 -

マシンガンの球は、シヴィアに一つも届く事はなかつた。

ノブナガ「なんだ？； ありや？」

シスケー水でしょ？」

ウボオー「そんなの、見れば、解る！」

「エイタン、飛び立つね。あの女は、放つておくね。命拾いすればいい。

氣球は、じんじん飛び立つてしまひ。

- 1 -

シヴァは、気球を見つめ、そして、後を構わずに追う。

シズク「？！あの女、追つてくれるよ？」

フランクリン「しつこい奴だ！俺の両手は機関銃！」

再び、フランクリンは、マシンガンを撃つものの、やはり、シヴァには届かなかった。

ウボオー「くそ！； 地上に降りて、奴を殺さう。」

シャル「もう。折角、飛び立つたのに、時間を取られるよ。」

シャルは、気球を操作しながら、そう、冗談めいた所に地上から、他のマフィアたちが、気球を銃撃し始めた。

ウボオーの最後

地上のマフィアたちは、雇い主の命により、一人でも多くの幻影旅団を殺そうと必死だつた。

「…止めろ…殺される…」

シヴァは、マフィアたちに声をかけるも、その声は誰にも届かず、聞いても理解なかつた。

ヤツリが飛ぶ間に、幻影旅団の気球は、崖の上に降り立つた。

ウボオー「そこの、水女！」

「？…」

ウボオー「お前は、後回しにしてやるよ。」

そう言つと、大男は、銃を打つてのマフィアたちを次々と手に掛けていつた。

「？…」

シヴァは、躊躇のないその攻撃に、怒りや悲しみを覚えるも顔には出さず男を見据える。

そして、暫くすると、マフィアたちは、全員、息絶えた。

ウボオー「これで、お前と戦えるな。来いよ。」

「・・・。」

ゆつくりと無表情で大男に近づく。

ウボオー「いらあ！」

ウボオー、ギンが、勢いよく、シヴァに近づいたが、攻撃は上手くいかなかつた。

ウボオー「？！」

ウボオーと呼ばれた男は、水の中に捕らわれてしまつたのであつた。

ノブナガ「？！ウボオー！」

「動くな。お前達が一步でも動けば、こいつは助からない。」

動いつゝとする、幻影旅団メンバーを制し、声を出すシヴァ。

フランクリン「何が目的なんだ！？」

幻影旅団メンバーは、仲間が捕えられた事に、少なからず動搖していた。

「別に。これ以上の殺しを止めて欲しかつただけよ。」

フェイタン「その割に、マフィアたちを助けなかたね。」

「助ける義理はないからね。」

シャル「その人物を解放してくれない？」

「私を追わないうつて約束が出来るならね。」

ノブナガ「約束する。だから、そいつを返してくれ・」

「・・・良いわ。けど、私が離れてから、この念を解除させてもらう。それまで、そこに居てもらつわ。あまり、この街で騒ぎを起さない事ね。」

そう言つと、シヴァは、身を翻して離れて、見えなくなつた頃、水の牢獄は、無くなつた。

ウボオー「ゴホッ！ゴホッ！・」

ノブナガ「大丈夫か？！　ウボオー！・」

ウボオー「あの女・・・殺してやる！・」

シャル「止めておきなよ。あの人、只者じゃない。」

シズク「・・・悔しいね。」

ウボオー「つ！・、俺は、諦めないからな！」

ダツ！

ノブナガ「ウボオー！」

こうして、ウボオー・ギンは、仲間と離れ離れとなり、命を落とす事になってしまったのであった。

捕えられた者

ウボオーギンが殺された事を知った仲間達は、街で、情報を入手しよつとしていた。

そんな中、ゴンとキルアは、お金欲しさに、ある仕事を行っている。

キルア「ゴンは、あつちを頼む。」

「ゴン」「解った。」

二人が追つてるのは、幻影旅団と思われる人物。

懸賞金の良さに、二人とも、捕える気になつたのであつた。だが、幻影旅団であるう人物が、そう簡単に捕まるはずがなく、逆に捕まる事になつた。

マチ「あんた達は、何が目的なんだい？」

キルア「言つたら、逃がしてくれる？」

ノブナガ「馬鹿な事を言つた。逃がしてたまるか。」

ゴン「俺達、懸賞金目的で追つてただけなんだ。逃がしてよ。」

ノブナガ「無理だつてんだろー。マチ？」

マチ「嘘をついてるよには見えないね。けど、逃がして、私達の

事を話されても困るわね。」

キルア「絶対に言わないって約束するから、逃がしてよ。それに、もう、追わないし。」

ノブナガ「だから、信じられるか！・・・兎に角、団長に聞かないとな。」

マチ「そうだね。あんた達を、連れて行く事にしたよ。」

ゴン「どうせ、俺達が何を言つても、連れて行く気なんでしょう？俺達、捕まつてゐる暇なんてないのに。」

ノブナガ「俺達を追つて來たのが、運のつきだつたな。」

こうして、ゴンが捕まつて、幻影旅団の本拠地へと連れて行かれた。

レオリオ「やっぱしがだらう・だから、止めておけって言つたのに。」

「

レオリオは、遠田から、ゴン達が捕まつた事を確認したものの、どうする事も出来ずに居た。

レオリオ「くそーっ！； どうすれば、あの一人を助ける事が出来るんだ？！」

レオリオが、一人になってしまい、四苦八苦していた時だった。

ブルルルルツ

ブルルルルツ

レオリオ「？！クラピカか？！」

レオリオは、突然、かかつてきた電話を、名前確認せずに出た。

バロン『否。バロンだよ。レオリオ君。』

レオリオ「バロンって・・・ハンター試験で一緒だった！； なんで、俺の番号を？？」

バロン『クラピカ君から聞いてね。彼と何回か、話して仲良くなつたんだ。彼は、今、幻影旅団を追つて電話になかなか出れないから、僕が電話をしたんだ。』

レオリオ「それは、ありがたい！； 俺、一人じゃ解決できない問題が発生したんで困つてたんだ；」

電話の主が、以前、会つた事があつて、ゴン達の事も知つてるバロンだと知つたレオリオ君は、藁にもすがる思いで、叫んだ。

バロン『・・・？じつやう、何か、尋常じゃない事があつたみたいだね。』

レオリオの慌てぶりに、バロンは冷静に聞いてみる。

レオリオ「それが、ゴンとキルアが幻影旅団に捕まつちましたんだ！」

バロン『なんだつて？！』

流石のバロンも、これを聞いて、驚いてしまつた。

レオリオ「どうすれば、一人を助けられるか、俺には、見当もつかないんだ；頼む；バロン；助けてくれないか？」

バロン『・・・助ける方法はなくもない。』

レオリオ「！…本当か！…」

レオリオは、電話に向かって大声で繰る。

バロン『レオリオ君。声を抑えてくれないか？これでも、我々は、幻影旅団について話してゐるんだ。聞かれでもしたら、面倒だろ？』

バロンは、呆れたように、レオリオに話す。

レオリオ「抑えるって言つたって、ゴンとキルアが危ないんだぞ！；

『

バロン『君がそこで、慌てて居たって、現状は良くはならないだろう。』

バロンは冷静にレオリオを宥めながら、作戦を練つていった。

「兎に角、そつちに向かう。レオリオ君は動かすに、そのままそこ
に居てくれ。」

レオリオ『けど、お前が来る前に、ゴンとキルアが殺されちゃった
ら。』

「クラピカ君は、秘策があるんだろ？それに賭けてみるしかない
んじゃないかな？』

レオリオ『……解った。』

「それじゃー、すぐに向かう。』

マロンはこの時、重要なミスをしてしまったこと、いまだに気づいて
いなかつた。

レオリオが知っているのは、バロンのみ。

クラピカが知っているのは、バロンとシヴァのみ。

ましてや、クラピカが信用しているのは、シヴァの方であつた。

そして、マロンは、バロンの姿のまま、一度、クラピカと会つてしま
りで居た。

少しずつ、マロンは、危な^いことくと呪を踏み入れて^{いく}こととな
る。

（まずは、クラピカを捕まえないと。）

電話のプッシュボタンを押し、クラピカの名前でホールを鳴らすと、思いのほか、その人物はすぐに出た。

「クラピカ？ 私、シヴァだけど？」

クラピカ『・・・ああ。』

「・・・何かあったの？』

声の様子から、何かがあったことは確かだが、いろいろな事がありすぎて、クラピカに問いかける。

クラピカ『・・・幻影旅団の・・・一人を捕らえた。』

「？！・・・それで？ そいつから、何か聞き出せたの？」

クラピカ『・・・ああ。クルタ族を滅ぼす計画を立てて、手にかけたのは、自分だと言った。』

「・・・まさか・・・殺したの？ その、幻影旅団も？！』

クラピカ『・・・仲間の恨みを晴らしたかっただけだ。』

「そんなの、クラピカが、苦しむだけじゃん！』

クラピカ『・・・私は、間違ったことはしていない。』

「つー；・・・・『ゴンとキルアが、幻影旅団につかまつた。」

クラピカ『？！な・・・に？・』

「彼らが、生きてる保障は今のところない。だけど、もし、クラピカ君関係の事で捕まつてるんだつたら、生きてる可能性がある！それなのに、幻影旅団の一昧を殺すなんて、助ける手がない！」

クラピカ『・・・・シヴァ。貴方は、ゴンとキルアとも知り合いなのか？』

「・・・え？」

クラピカ『・・・なぜ、『ゴンとキルアの事にそんなに詳しいのだ？この、仕事の間中、君が、忙しく働いていた事は知っている。それなのに、ゴンとキルアと知り合つ暇がいつ、あつた？』

（やばい！…忘れていた・私は、マロンであり、マロンじやなかつた・）

何面相も顔を持つていても、中身は、同じ。

口から、ぼうが出るのは時間の問題だつたのだ。

「・・・全部、話す。だから、今は、レオリオ君の居るホテルに行きたい。そこで作戦を練ろ。」

クラピカ『私が君のほうへ向かう。どいままでが本当で、どいままでが嘘なのか、信用できないからね。』

「クスクス、信用してくれとは言わないわ。早く、合流しましょう。ゴン達の身が気になるわ。」

そして、しばらくすると、マロンが泊まってるホテルのクラピカがやつてきた。

「行きましょ。」

クラピカ「待つてくれ！君は、誰なんだ？！」

そう。マロンはマロンの姿のまま、クラピカと合流したのだ。

「それも、後で話すわ。今は、一刻も早く、レオリオ君との合流を。」

クラピカ「！・・・ああ。」

そして、レオリオの居るホテルへとやつてきた、3人は合流した。

レオリオ「クラピカ！久しぶりだな…それに…えつと…」

「初めてましてと書うべきなのかしら？バロンよ。いいえ。本当の名前は、マロンね。」

クラピカ「？！一体、どうこいつとなんだ？！」

レオリオ「そうだ・バロンの…妹か何かか？それで、俺たちの事も聞いたんだろ！」

一人とも、マロンが言つたことは、まったく信じていないようだ。

「念能力なの。私の。老若男女になれるのよ。」

レオリオ「・・・マジか?・」

「ええ。実際の『』の姿が、本当の姿。」

クラピカ「では、なぜ、今まで、その姿を隠していたのだ?隠す理由があつたからだろ?」

「大正解よ。」

レオリオ「・・・まさか、幻影旅団の一昧?」

「それは、不正解。あの人たちは、全然、知り合いじゃないもの。私の弟が、貴方たちの友達でね?」

クラピカ「・・・?」

「ああ。似てないから、解らないわよね。『』は、義理の弟なの。『』

レオリオ「?・『』が!って、『』の義理のお姉さん?」

「ええ。『』とは、仲が悪いわけじゃない。ただ、あの子、決めた事には突っ走る体質で、私が邪魔するのも許せない子だから。」

クラピカ「・・・だから、隠れて支えよう」と?」

「いいえ。『』とは・・・関わるつもりはなかつた。姉離れ、弟離れするべきだつたのに、『』なんにも、運命は、私たちを引き合わせ

た。」

レオリオ「バロンもあんたなのか？だから、ゴンを遠ざけようとしたのか！」

「そう。だけど、キルア君とも仲がよくなつて、クラピカ君や、レオリオ君とも、関わつてゐるうちに、離れなくなつてたの。」

クラピカ「・・・。」

「この話は、ここまでにしましよう。今は、ゴンとキルアの救出が先よ。」

レオリオ「そうだけど、一体、どうするんだ？・・・」

「・・・ヒソカに連絡を取る。」

レオリオ「なつ？！無謀だ！第一、ヒソカが、協力するとは思えねえ！」

クラピカ「だが、それに賭けるしか方法はない。」

「ヒソカは、ゴンの事を気に入つてゐる。殺すような事はしないでしょ。そして、幻影旅団、団長とも戦いたいと思つてゐるはず。ヒソカが、協力しない可能性はない。」

レオリオ「協力したとして、その後はどうする？！戦うのか？！幻影旅団と？！」

「何名か、捕らえられれば、人質交換ができるはず。特に、幻影旅

団団長がキーパーソンね。」

クラピカ「だが、どの人物が、幻影旅団団長かわからない。」

「それは、私に任せて。ネオン＝ノストラードを監視してゐる際に、団長らしき人物を見たわ。」

レオリオ「すげー！」

「兎に角、まず、ヒソカとコンタクトを取りましょ。そして、行動よ。」

こうして、マロンは、幻影旅団との交戦に加わる事となつたのだ。

プルルルルツ
力チャツ

プルルルルツ

ヒソカ『もしもし?』

「ヒソカ。誰だか聞かないところを見ると、私が話したい内容も解つてるわね?』

ヒソカ『んー?・・・僕への愛の告白とか?』

「ふざけないで!・・・そこに、幻影旅団団長は居るの?』

ヒソカ『・・・ああ。居るよ。変わつてほしい?』

「ええ。』

ヒソカ『良いけど、タダとは言わないよね?』

「・・・ヒソカの行動しだいね。』

ヒソカ『・・・解つた。交渉成立。団長。君と話したいって人物が。

』

クロロ『?誰だ?』

電話の向こう側で、警戒している男の声が聞こえてきた。

ヒソカ『僕の大切な人物。手を出したら、団長でも許さない。』

3人「・・・・」

スピーカーフォンにしているため、3人が顔を見合わせ苦笑する。

クロロ『お前が気に入るなんて、珍しいな。・・・良いだろ？・・・誰だ？』

「ナンバー11は死んだわ。」

クロロ『・・・ほつ？その証拠は？』

「鎌野郎の事、相当、頭にきてたみたいね。可哀想に。」

クロロ『何が言いたい？誰なんだ？』

「用心深いのは構わないけれど、もう、仲間を失いたくないでしょう？」

クロロ『何？』

「・・・誰も、失わないために取引しましそう？そこに、10歳くらいの坊や一人、居るでしょう？」

クロロ『・・・どこまで情報を握ってる？』

「・・・その坊やたちに手出ししないで、無事に帰すといつのであれば、全部、話すわ。」

クロロ『俺にとつてのメリットがない。』

「そうね・・・私が、そこに居る坊やたちの代わりに仲間にいると
いつたら?』

クロロ『?』

クラピカ「なつ?」

レオリオ「?」

バツ!!

隣で聞いていたクラピカ君が声を上げよつとしたり、何とか、レオ
リオ君に押さえ込まれた。

クロロ『・・・』

「・・・欠番がある今、この話はいい話だと思つた?』

クロロ『・・・君がどれくらい、俺の見込みに答えられるか解らな
いからな。』

「では、会いましょう?直接、会つてお話をしたいと思っていたん
です。人数は、少ないほうが良いですよ?・・・過つて、殺しかね
ませんから。』

この時、マロンは、自分が出せる憎しみの声を全開で出して
いたため、クラピカ君とレオリオ君は田の前で怯えてしまつた;

クロロ『・・・そちらの人数は?』

「私に仲間が居ると思つて？坊や達は、可愛いから、たまたま手助けができるならと思つてるだけだし、関わりはないわ。ですから、私一人で、グリーンベレッジホテルのロビーに居ます。1時間後でどうですか？」

クロロ『・・・。』

重い空気が周囲に漂つ中、団長の決断が。

クロロ『良いだろつ。俺と、もう一人、連れて行く。用心のためだ。それで構わないなら、そのホテルに向かおう。』

「良いわ。待つている。』

そう言つと、携帯をお互いに切る。

クロロ「・・・何者だ？あいつは？ヒソカ？』

ヒソカ「自分の田で確かめなよ？僕は、お気に入りの子を、わざわざ、団長に教えるつもりはない。』

私たちの知らないところで、小さな火花が飛んでいた事は、知る由もない。

「これで、団長がやつてくる。けれど、どうすれば、捕まえられるかよ。ましてや、二人。難しくなりすぎた。』

クラピカ「いや。捕まえるのは、私がする。一人は、作戦を実行してほしい。』

レオリオ「おいおい・・クラピカ・また、危ない事をするんじゃないんだろーな?・」

クラピカ「誰かが犠牲を払わなければ、ゴンとキルアは、無事に帰つてこないだろー・」

「けれど、この事も忘れないで?私達の今回の目的は、あくまでゴンとキルアの救出。幻影旅団の首を取ることじやない。解つたわね?」

クラピカ「つ!・・・・・ああ。解つている。だが、そつきの言葉は、気に入らない。」

「へ~そつきの言葉?」

クラピカ「・・・マロンさんが、幻影旅団の仲間に入るといつ内容の話だ。」

「あれくらい言わないと、信じてもらえないじやない?・」

レオリオ「だからって、もし、失敗しちまつた時、マロンまで、連れて行かれちまつたら・」

「私は、一人の知らない念をまだまだ持つているのよ?だから、安心して?」

マロンは、一人を安心させるためにそう告げたが、マロン自身の念は、もう、底をつけかけていた。

「クラピカ」では、作戦を話す。これが成功すれば、幻影旅団団長と取引可能だ。」

この時、マロンは知る由もなかつた。

自分の能力がどこまでつきかけているのかを。

この過ちで、自分の運命を変えるということを・・・。

ヒソカに願い

【ヒソカ視点】

ヒソカ「・・・。」

それは、突然の出来事だった。

マロン『ヒソカにお願いがあるの。誰にも聞かれない様に話したいんだけど。』

愛しのマロンが僕に願いなんて、よっぽど困ってる事がいると見える。

だから、僕は、快く、マロンの要求通り、仲間には聞かれない所でマロンに電話をかけた。

マロン『もしもし? ヒソカ?』

ヒソカ「ああ。どうしたんだい?」

僕は、要件をマロンに聞いたました。

マロン『・・・こんな事、頼んで申し訳ないと困けど、私を匿して欲しいの。』

ヒソカ「?匿?」

マロン『私の念能力は、もう、底をぬきてる。無理矢理、使って

入るけど、限界なの。』

ヒソカ「それで？」

マロン『・・・きっと、貴方に次に会う時は、私は、倒れてしまふと思う。私は、ゴンに会ってはいけないの。だから、ヒソカの力で、私をバロンの姿の状態がマロンになつても戻はるよ。』

ヒソカ「それは、不可能じゃないけど、それって、幻影旅団に捕まるって事だよ？」

マロン『解つてゐる。でも、他に方法は思いつかないの。奇術師ヒソカの腕を借りたい。お願ひ。』

ヒソカ「・・・解つた。マロンの事は、僕が守るよ。それじゃ、後日、また会おう。』

マロン『ありがとうございます。無理なお願い、聞いてくれてありがとうございます。それじゃ、後日、また会おう。』

そつと、マロンは電話を切つた。

【ヒソカ視点終】

マロン「・・・。」

電話を切つて、マロンは、倒れそつなるのを感じか堪えた。

マロン「・・・。時間がない；早く、行動に移さないと・・・」

震える足を何とか立たせ、クラピカとレオリオの元へと戻るマロン。

クラピカ「マロンさん。」こちらの準備は整いました。」

レオリオ「俺の方も良いぜ！作戦を実行に移そう。」ゴンとキルアを助けるんだ！」

マロン「そうね。二人を救いましょう。失敗は、許されない。2人とも。気を引き締めてね？良い？クラピカ君？これ以上、幻影旅団を刺激しない事。じゃないと、付け狙われるのは、貴方だけじゃないのよ？」

クラピカ「・・・解つて。今回の目的は、あくまで、ゴンとキルアの救出だ。それ以上の目的はない。約束しよう。」

マロン「それじゃ、行きましょう。時間よ。」

こうして、マロン、クラピカ、レオリオの三人は、ゴンとキルアを救うために、行動を開始したのであった。

作戦実行

グリーンベレッジホテルのロビーに着いた私達は、配置にそれぞれ着いた。

公証人として、会つ事となつたマロンは、シヴァの姿になつていて。クラピカは、幻影旅団団長を捕えるために遠くない場所で、シヴァを見つめる。

レオリオは、近くには居ないが、重要な任務を担つていた。

そして、時間通りに幻影旅団団長と、もう一人の女が現れた。

「・・・。」

クロロ「・・・。」

女「・・・。」

周りは、一般客のみ。この3人の異様な空氣には気づかない。

そして、シヴァは、クラピカとレオリオにしか解らない合図を送つた瞬間。

バチンッ！

クロロ「?—なんだ?—」

女「？！周りが、見えない！？」

グリーンベレッジホテルのロビー一面が、一瞬にして、電機が落ちたのだ。

そう。シヴァ達が考えた作戦とは、視覚を奪い、捕獲する事。

人間の視力と脳は、伝達が遅いもの。

光で目が慣れてしまつた状況下で、一瞬の間に周りを闇の世界にした瞬間、視力は役に立たなくなるのだ。

レオリオが任されていた仕事は、グリーンベレッジホテルのロビー全体の電気を落とす事。

そして、一瞬の隙が生み出された幻影旅団団長とそのメンバーは。

クロロ「・・・・・」

女「・・・・・」

クラピカ「任務、成功だな。」

クラピカの念により、捕えられた一人の姿があつた。

クロロ「やはり、仲間がいたんだな。それも、鎖野郎と。」

「仲間・・・確かにそうね。けれど、命を奪つつもりはないわ。私達の目的は、あくまで、人質交渉ですもの。」

レオリオ「よつしゃ！これで、『コンとキルアを助ける事が出来るな。

「喜ぶのは、まだ早いわ。幻影旅団の他のメンバーは、手強い。交渉時に、攻撃をされでもしたら、終わりだわ。」

クラピカ「それなら、二人に、束縛する中指の鎖（ヤツジメントチエーン）を使い、律する小指の鎖（ヤーンジエイル）で、我々を追えない様に制約付けては？」

「火に油をこれ以上、注ぐ事はないわ。団長さんが、仲間に忠告すればする事だわ。貴方の命令は、絶対なんでしょう？」

クロロ「・・・何故、そう思う？」

「簡単だわ。貴方を観察していて解った。貴方は、完璧主義者。仲間達を危険に犯していながら、自分も危険の中に立っている。そんな人物は、メンバーの破滅は恐れてない。多分、貴方が一番、恐れるのは、旅団の崩壊でしょう？」

クロロ「・・・。」

「そして、今、その危機に陥つてゐる。けれど、それを救う道があるとしたら繰るでしょ？団長さん？」

クロロ「・・・さつきから、何を言つてゐるんだい？僕は、普通の青年で、幻影旅団とはまったく関係は。」

「クロロ＝ルシルフルつて言つたのよね？本名は？」

クロロ「？！」

「あら？驚き？そりよね。地上じゃ、出回らない幻影旅団の個人情報。それも、旅団帳の情報を持つてると知つたら驚くわよね。」

クロロ「・・・ヒソカから、聞いたのか？」

「彼は、貴方の事を話していないわ。私が貴方に会つた事があるのよ。」

クロロ「ほう？君みたいに美しい人物、一度、見たら、忘れるとは思えないけどな。」

「・・・世間話が過ぎたみたいね。とにかく、私達は、ゴンとキルアの一人が、無事に戻ればそれで構わない。どう？条件をのむの？」

クロロ「・・・俺達が血眼になつて、お前達を追うかもしれないぞ？」

「その時は、貴方達を容赦なく、排除させてもらうわ。今は、貴方達を失うのは、得策じゃないから、止めておくれけどね。結論を。クロロ＝ルシリフルさん？」

クロロ「・・・交渉しよう。」

「ありがとう。話の解る人で良かったわ。」

「うして、ゴンとキルア、救出作戦は、終盤へとやつて来た。

交換成立（前書き）

だいぶ、話の内容や、セリフが違つていいと感りますが、すみません；
久しぶりに描いたので、小説の中身がここまでグチャグチャだとは思わなかつたもので；
度々、更新が遅れて申し訳ありませんでした；
これからは、再び、書き始めたいと思つので、よろしくお願いします；

交換成立

捕まえた、幻影旅団団長は、要求通り、仲間にゴンとキルアを解放するよう伝えた。

そして、落ち合つ場所や時間も決め、シヴァ（マロン）達は、その場所へと向かった。

キツ！

バタンッ

ガチャッ

「・・・降ろして。」

クラピカ「・・・」

クロロ「・・・」

シヴァの合図で、クラピカが、団長を引き連れ、車から降りた所で、飛行船が見えた。

「あれね。」

そして、飛行船は、静かに降り立つと、その中から、数名、降りてきた。

マチ「・・・」

ゴン「・・・」

キルア「・・・。」

ヒソカ「・・・。」

見た事のある面々だつたが、お互に、今、気にしてゐる暇はないようで、直ぐに取引が始つた。

「まずは、人質が、操られていないか確認したい。電話を繋べ。」

トウルルルルッ！

キルア『もしもし?』

電話口に出たのは、少し先に居るキルアだつた。

「キルア。胸に電話を当ててくれる?」

キルア『いは?』

そう言つと、キルアは、胸に電話をくつつけた。

センリツ「ええ。良いわ。・・・大丈夫。音に、異常な乱れはないから、操られてないわ。」

仕事仲間のセンリツに、操られていないかを確認したシヴァは。

「同時に人質交換しましょう!」

マチ「良いわ!」

シヴァの言葉に、マチは頷き、人質を解放する。

それを見たシヴィアも、クラピカに同じく、人質を解放させた。

ゴン&キルア「・・・。」

クロロ&パグノダ「・・・。」

人質として捕らわれた者たちがすれ違うも何も起こららずに、交渉成立となつた。

レオリオ「ゴンつ！ キルアつ！ 心配したんだぜ！」

クラピカ「全くだ；もう、余り無茶をしないでくれないか？」

コンー 2人とも、ごめん…」

ギルア 悪か たな;
ケテビガにおさん

レオリオ、お、さん、て、言、の、
し、か、洞、は、止、め、る、よ、な、！」

コントキルアの無事な姿を捕えたためか、シヴァの状態を気付く者は居なかつた。

• • • • • • •

ヒソカ「！“薄っぺらな嘘”」ドッキリテクスチャー。

ドッキリテクスチャー
な嘘
” 。
「

念の使いすぎと、体力の限界が、今になつて来てしまい、シヴァは、もう、立つてられるような状態ではなかつた。

ヒソカが、声を出さずにそつと、シヴァを薄っぺらな嘘で、隠すと、伸縮自在の愛に^{パンジー・ガム}よつて、シヴァを引き寄せ、抱きしめた。

（ありがとう・・・ヒソカ・・・）めんね。迷惑・・・掛けて。）

抱きしめられながら、シヴァの姿は消え失せ、元の姿となり、ヒソカと共に、飛行船に乗り込んだマロン。

ゴン「あ！ そう言えば、あの、水色の人に、お礼、言ってなかつた！ お姉さん！ ありが・・・って、あれ？」

キルア「？ 何処に行つたんだ？」

クラピカ「？ 私も解らない。」

レオリオ「俺もだ。」

ゴン「・・・。」

こうして、マロンは、気絶し、ヒソカと共に、飛行船に乗り込んだのであった。

交換成立（後書き）

この先から、オリジナル小説へ転換したいと思います。

キメラアントとの戦いは、私には書けない代物かと思つたので；
キメラアント編がないのは変だと思われる方には、すみませんが、
ご了承していただくしかありません；

これから先は、オリジナルキャラである、マロンさんに関するお話
に進んでいくと思われます；

ゴンとキルアを登場させる時まで、少々、お待ちを…；
ご迷惑をおかけします；

ヒソカ視点？

「・・・。」

ヒソカ「・・・。」

僕の名前は、ヒソカ。団長達を救出する際にマロンを連れてきた。

あれから、一週間が経過したが、マロンは、まだ覚めない。

流石の僕も、心配になつてゐるが、どうする事も出来ず見守り続けていた時。

「・・・ん。」

ヒソカ「？・・・マロン？」

「・・・ん・・・」

ヒソカ「こ、は、幻影旅団の飛行船の中だよ。もう、マロン、頼んだだろ？」

僕は、そう言いながら、マロンに水を差し出す。

「・・・あ。う。思い出した。ありがと。ヒソカ。」

マロンは、記憶を手繕りながら、自分の体を起こすと、水を受け取

り礼を言つてへる。

ヒソカ「気にしないで。僕が、やりたくつてやつただけだから。」

僕は、水を促しながら、話を続け。

「うん。それでもありがと。」

マロンは、再び礼を言つて、水を飲みだした。

そこで、僕は、マロンの変化に気が付き、聞きたいたのでも、聞いてみる。

ヒソカ「ねえ？マロン。念が、感じられないけど？」

そう。僕が、気づいたのは、マロンの念能力が感じないといつ事。

「……そうだね。感じないでしょ？」

ヒソカ「……どうしてか聞いても良い？」

「……念の使いすぎ。」

ヒソカ「念の？」

「わう。電話した時に言つたでしょ？私は、倒れるつて。念の使い過ぎで。」

ヒソカ「けど、念がなくなるとね。」

「なくなってる訳じゃないよ。使えないだけ。どのくらいこの期間が、解らないけど。」

ヒソカ「？解らないの？」

「うん。私の念の機能は、凄く不思議なものだから、使えない期限が定まってないの。けれど、使える期限は決まってる。それを今回、有に超してしまった。」

ヒソカ「それじゃ、今、あの妖精みたいな子たちは、居ないの？」

僕は、マロンの言葉の内容に楽しくなり問い合わせながら近づいていく。

「あ。いない訳じゃないよ。見えないだけで、皆、私の中に居るから。」

ヒソカ「？中？」

「ね、見えないし、念を感じないだろ？けど、皆、私の中に居るから、ヒソカが私に何かしようとするれば、私の意思を無視して、攻撃するわ。」

ヒソカ「本当に？vv」

マロンの話した内容に、テンションが上がってしまいます。

「攻撃しようとしてないでよ？； 私は、殺したくないんだから。」

ヒソカ「だつて、マロン、天空闘技場の時、本気、出してなかつた

でしょ？」

「……気付いてたんだ。」

ヒソカ「うふ。なんとなく、だけね。」

「……うう。けど、今も戦うつもりはない。念が使えないって、この子たちの制御が利かない今、貴方に攻撃はして欲しくない。」

ヒソカ「……解ったよ。君が嫌がる姿は見たくないから、止めておくよ。」

マロンに嫌われたくない、僕は、今回ばかりは、引き下がる事にした。

「……それよりも、あれからどの位、経つたの？……団長さん達は無事？」

ヒソカ「マロンが倒れてから、一週間が経つたよ。団長は無事。」

「……“団長は”？って、どうこうう事？」

ヒソカ「……もう一人、捕まえただろう。」

「……ええ。パクノダさん……よね？まさか、死んだの？」

ヒソカ「そう言つ事。」

「どうして？…クラピカ君の念の能力は、教えたはずよ！なのに…・なんで…」

マロンは、僕の言葉に驚き、布団から出て、涙田に問いかけて詰め寄り。

ヒソカ「念を使つたみたい。」

「？“みたい”？」

マロンは、僕の言葉をちゃんと聞いてくれる。親身になつて。そういう所が、堪らない。

ヒソカ「そつ。彼女の念も、君と同じで、特質系の念能力者だ。僕は彼女の能力を詳しくは知らないけど、念を使つたのは、間違いないよ。」

「・・・そう。」

ヒソカ「・・・団長には、君が田覚めたら会わせるよつて言われてるんだけど？」

「やつぱつ、氣付いてるんだ。」

ヒソカ「僕が何かしようとしてるのこな、勘が良いからね。君を連れ込んだのに、直ぐに気付いたよ。どうする?会いたくないなら、会わなくつても。」

「・・・ひん。団長をここに会つ。あつと、話せなきや黙田なんだ」と思つから。」

ヒソカ「やつ。それじゃ、今、呼んでくるから。」

僕は、そう言つて、部屋から、一度、出ていく事にした。

そうでもしないと、彼女に本当に何をするか解らないからね。

クロロの興味

ヒソカが出て、いつから、自分の気持ちを整理しつつ、自分の中でも生きる精霊達に話しかける。

（皆。私の言葉が聞こえたはず。もし、団長さんが、私に何かしようとしても、何もしないで。）

マロンは、覚悟を決めて、団長に向かって想つていていた。

コンコンッ

すると、その時、ヒソカに『えられた部屋（ヒソカの部屋？）』に、ノックの音が響いた。

ヒソカ『僕。入つても良い？』

「・・・うん。」
ガチャ

ヒソカ「・・・団長。良い？彼女との面会せ。」

クロロ「5分間だけ。だろ？どれだけ、気に入つてるんだ？」

部屋の扉が開き、団長であるクロロが、中に居るマロンを見つめる。

クロロ「？あの水色の女じゃないが？」

ヒソカ「あの女性がその水色の女性自身だよ。」

クロロ「何だと？」

クロロが、疑わしげに、部屋の中に佇んでる女を見つめる。

「・・・」

マロンは、居たまんなうのを堪え、椅子に座り続け、相手が動き出すのを待つ。

クロロ「・・・まあ、良い。話せば、解る事だ。」

ヒソカ「マロン。気をつけてね? 団長に気に入られると厄介だから。」

「ありがと。後でね。ヒソカ。」

ヒソカ「うそ。」

そう言い、クロロが部屋の中に入り、ヒソカは、部屋から離れていった。

クロロ「・・・ヒソカが気に入ってるから、凄い人物だと思つていたが、まさか、こんなに普通とは。」

「・・・兎に角、立つてお話しするのもどうかと思つので、座つて下さい。私の部屋ではあつませんが。」

田の前に置いてある椅子を勧め。

クロロ「それで？“水色の女性”と君は、本当に同一人物なのか？」

「ええ。」

マロンは、嘘を吐く事なく、正直に話す。

クロロ「・・・念か？」

「それは、言いつもりはないですね。」

クロロ「クックク。それは、肯定と取れるが？」

クロロと呼ばれた団長は、マロンの言葉に笑つてしまい。

クロロ「もう言えよ、血口紹介がまだだつたな。俺の名前は。」

「知つてます。クロロ＝ルシルフルでしょ？」

クロロ「何？」

「私は、貴方に既に二回、会つてます。」

クロロ「・・・一回は、鎌野郎の時だと思つが、もう一方には記憶がないが？君自身も、水色の女性も。」

疑わしげな目線で、マロンを見つめながら、探るように問いかけ。

「・・・ネオン＝ノストラードに会つた時で、男も居たのは、覚えていますか？」

クロロ「男？あの時は、標的が、彼女だったから……まさか。」

ほんの少し記憶を探り、目立つ男が居た事を思い出し。

「そのままかです。あの人物は、私です。」

クロロ「？…男にも…なれるのか。」

マロンの言葉にかなり驚き、目を見張り。

「そうなりますね。」

クロロ「…なるほど。ヒソカが気に入ってる理由が解つてきた。」

「それよりも、何故、あの女性は死んでしまったんですか？鎖野郎である、クラピカ君は、貴方達に念を使うなと言つていた。それは、死を意味すると解つていたはずです！なのに、何故！」

クロロ「…パクノダは、人の記憶を読み取る事ができる能力者なんだ。」

「人の記憶？」

クロロ「そうだ。ゴン君とキルアくんに触れた時、ゴン君の方から、とてもいい記憶が見て取れたんだろう。君たち仲間の記憶だ。」

「？」

クロロ「つまり、パクノダは、ゴン君達を殺すのが惜しいと思つた

んだ。だが、このまま放つておけば、ウボオーを殺した、鎖野郎を追う者が出る。だから。」

「だから・・・自分の身を投げて、念を使つたと？」

クロロ「そう書つ事になる。」

「・・・では、もう、ゴン達を追つつもりはないんですね。」

クロロ「ああ。ない。ただし、他に欲しい者を見つけたが。」

「え？」

マロンが安心したのも束の間、団長としてのスイッチが入った様に告げ。

クロロ「君だ。俺は、君が欲しくなった。」

「なつ！、私達の記憶を彼女から聞いたか何かしたんでしょう？！だから、諦めると！」

クロロ「俺は、パクノダから、記憶は見せてもらつてない。それに、見た仲間の話に、君に関する事は言つてなかつた。」

「私は、貴方達の仲間になんかならないわ！“一度と”人殺しはない！」

クロロ「・・・“一度と”？だと？」

「・・・え？なんで・・・私・・・一度となんて・・・」

マロンは、自分が言った言葉が不思議でたまらなかつた。

そして、徐々にマロンは、怖くなり、体が震えだした。

クロロ「おい。顔色が悪い。どうかしたか？」

そういう、クロロが手を、マロンへと近づけた瞬間。

バチッ！

クロロ「？！」

マロンの体から、高圧電流のよつなものが発せられていた。

「止めて……止めて……静まつて……私は……平氣だから……」

マロンは、何かに咳きながら、自分の体を抱きしめる。

クロロ「……。」

「クロロ……さん。それ以上……近づかないで下を……」

クロロ「……解った。」

クロロが、そつて葉にすると、マロンの体にまとつてた電流が止まつた。

「……。」

サッ

そして、マロンは、氣を失ってしまった。

自分の秘密に気付く事なく。

だが、その秘密は、少しずつ剥がれしていく事になる。

マロンの過去

ヒソカ「・・・。」

「・・・。」

また、僕だよ。一度、田を覚ましたマロンがまた、倒れてしまった。

5分経過して、部屋に戻つてみると、クロロが固まつていて、マロンが倒れていた。

だから、僕が、彼女を抱きあげて、ベッドに戻そうとした。

クロロ「その女、危険だ。」

団長が、珍しくそんな事を言つから、一度、マロンを見つめたが、僕は、気にすることなく、抱きあげたんだよね。

何もなかつたよ?」

だって、1週間前もそつだつたから。

でも、団長が警戒するほどの何かが、この5分間の間にあつたんだりつねじ、僕は気にせずマロンをベッドに寝かせた。

クロロ「何者だ?」

ヒソカ「今は、何も話せないよ。僕も・・・彼女もね。」

クロロ「・・・・・」

団長が、そんな事を僕に聞いて、去つていったが、実の所、僕も彼女の事をよく知らない。

だから、答えられないんだ。彼女が、目覚めるまではね。

こうして、僕の目の前で、また、彼女は眠つている。

「・・・・・」

ヒソカ「・・・君は、一体、何者なんだい？」

僕は、小声で、マロンに問いかけるも、マロンからは、答えがない。

ヒソカ「・・・マロン。」

「・・・私にも・・・その答えは解らない。」

ヒソカ「?・・・・・起きて・・・居たのかい？」

目を開けて、ベッドに横たわるマロンに問いかける。

「少し前からね。・・・考へてたの。」

ヒソカ「考へてたって何を？」

僕は、椅子に座りながら、マロンに優しく問いかける。

「・・・私、拾われる前の記憶がないの。」

ヒソカ「・・・うん。」

「ジンに・・・拾われてから、色々な事があつたから、覚えていないのも・・・不思議じゃない。けれど、何かが、私の中で渦巻いてる気がしてならないの。」

ヒソカ「それが何かは、マロンは？」

「解らない。けれど、何かを忘れてるんだと思う。」

ヒソカ「どうするんだい？」

「・・・知りたいよ。けど、怖い。それでも、知らないといけないんだと思う。」

マロンは、体を起こしながら、考え。

ヒソカ「そうだ。1週間、眠り続けていたんだ。食事をとろう。考えるのはそれからでも構わないだらう?」

「けど。」

ヒソカ「大丈夫。他の奴らには何も言わせないから。」

「・・・私は、ここに居て良いの?」

ヒソカ「当たり前じゃないか。・・・どうしたんだい?僕が、怖いかい?」

ヒソカは、出て行こうとした体を戻し、マロンに近づき聞いかけ。

「ヒソカが怖いんじゃない！・・・私自身が怖いの。何者なのか、自分でも解らない。」

ヒソカ「僕だつて、そうだよ。怖がる事なんかない。」

「けど！・・・もし、過去に人を殺してたら？どんな理由が解らない。貴方達をもし、手に掛けるような事があつたら？」

ヒソカ「・・・やつなつたら、僕が、全力で、マロンを止めてあげる。守つてあげる。」

ヒソカは、優しくやつぱり、マロンを抱きしめる。

「ヒソカ。」

ヒソカ「マロンが好きなんだ。だから・・・。」

「わ・・・」めん。やつぱり、私・

ヒソカ「良いよ。答えないつて。僕が勝手に好きになつただけだから。」

「・・・じめん。」

ヒソカ「とにかく、今は、早く元気になつて欲しいから、何か、持つてくれるよ。」

ヒソカは、そつぱつと、部屋から出て行つた。

ヒソカ（まだ、摘み取るには惜しい。けど、摘み食いしたいなあ）

▽

ヒソカは、興奮する体や理性を抑えながら、歩いていく。

「・・・。」

マロンは、何日も体を横にしていたから、動きたくって仕方がない衝動に駆られていた。

そして、布団から抜け出し、部屋から出でてみる事にしたマロン。

「・・・。」

念が使えない今、外に出る事がどれほど危険な事か解つていいが、状況も気になつていたために、飛行船内を体験したくなつた。

（これが、幻影旅団の人たちが乗つてる飛行船。何処に向かつてるんだろう。）

外を眺めてみるも、地上はかなり遠いのか、見えなかつた。

？「～～。」

？「～～。」

（？）

外を眺めていた、マロンの耳に、話し声が聞こえた。

クロロ「水色の女に会つた事があるのか？」

シャル「うん。競売場に居た時に、追つて来た女に間違いないと思
う。」

クロロ「攻撃してきたのか？」

シャル「ウボオーが、攻撃を仕掛けて、返り討ひされたよ。」

クロロ「あのウボオーが？」

シャル「秒殺だった。殺す気だったら、あの時にウボオーは、死ん
でた。」

クロロ「本当に不思議な女だ。・・・少し調べてくれないか？」

シャル「俺も興味があつたから、良いよ。」

「・・・。」

マロンは、会話を聞きながら、部屋へと戻つていった。

そして、暫くすると、食事を手にしたヒソカが、部屋に戻つてきた。

ヒソカ「マロン。こんな物しか作れなかつたけど。・・・マロン？」

部屋に戻つてみると、そこにはマロンの姿はなく、テーブルの上に
手紙があるのが見て取れ。

ヒソカ「・・・」

カサツ

手紙を手に取り、内容を見る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8156c/>

ハンター初心者

2011年11月24日13時51分発行